彷徨 22

都立西高ワンダーフォーゲル部

発刊に際して……

山なるものへの探索

クラブというものの良さは何と言っても、得難い親友を得、彼等と共に活動する喜びを体験することであろう。更にクラブでは同級生ばかりでなく上級、下級生との縦のつながりが他よりも重要視される。先輩から手取り足取りで技術や知識を教わり、それをまた後輩に伝えてゆく。この繰り返しがすなわち伝統である。さて……現在我々はその伝統をどれぐらい受け継いでいるだろうか。それはかなり怪しい。今僕等はあまりに山に関する知識が足りない。後輩の質問にも満足な答を見出せない。ガイドブック的知識ならともかく、山に登る者、山を愛する者の持つべき心構えがあまりに足りないと思う。残っているのは、伝言ゲームのごとく、繰り返し伝えるうちに本質を失い、意味を無くしかけた『伝統』のみの様な気がする。

ある日、部室を整理していると、膨大な量の部誌や食糧ノートが出て来た。何の気なしにそれに目を通すと、まさしくそこに本質を見つけたのだった。中でも十数年前に発行されたガリ版刷りの小冊子「山なる者への探索」には部員が自分達なりに山の生活を研究した成果が特にくわしく発表されていた。それを発見した時、なぜか、とてもなつかしい人にでも会ったような気がした。まさに、はるか上の先輩との『出会い』である。

我々はこれだけの資料をかかえていながら、それに見向きもしなかった。そして自分達の記録すら残そうとはしなかった。彷徨発行の10年のブランクがそれを、はっきりと物語っている。

我々はここに、苦労の末集めた記録を集成した結果として彷徨22号を発行する。後輩の皆には、本誌ともども、先輩達の記録を活用して、山なるものへの探索を続けていってほしいと思う。

弔　辞

昭和58年8月21日、西朋登高会の森下道夫氏が越後、守門(すもん)山中の沢を登る途中、水死した。西高25期の先輩である。氏はここ数年間同会の中心的存在で、ほとんど毎週山へ出かける程で、記録されている同会の山行の大半は氏の活躍によるものである。更に、本誌の手本となった、西朋会誌『西朋20』『西朋21』は全て氏の編集及び内筆によるものであった。何という皮肉であろうか、その死を知ったのは、ちょうど我々が本誌製作のため、印刷会社へ行った時であった。4月に西朋総会で会ったばかりだったために、我々も大きなショックを受けた。

心から森下氏の冥福を祈ると共に、氏の山への情熱をこれからもしっかりと受け継いでゆきたいと思う次第である。

新潟で登山中死ぬ

二十一日午前七時半ごろ、新潟県北魚沼郡守門村の守門岳(一五三八㍍)を登山中の練馬区下石神井二の一七の一、会社員、森下道夫さん(三〇)は、沢の深みにはまり、行方不明になり、新潟県警小出署員や地元民の捜索で同十時二十五分、水死体で発見された。

調べによると、森下さんは東京に本部を置く登山クラブ「わらじの仲間」の会員で、同日午前六時ごろから会の仲間の大学生と二人で同岳本池沢の沢登りをしていた。途中、森下さんが約五〇㍍下にザイルを投げ下ろし、下の沢へ降りたが、沢に足を入れた際、水深が予想より深く、リュックの重みなどから水中に沈み、おぼれたらしい。

'83. 8. 22.
毎日新聞
(東京版)

編集後記にかえて

[illegible]

[illegible]

(1981.5.[illegible])

森下氏が書いた
西朋20号の一部 ▶

西朋 20号
1981年 6月1日　100部 発行
編集 森下道夫
発行所 西朋登高会　川崎市高津区宮崎 6-6-5
上遠野 浩方

山行総覧
1974 ～ 1983

28th　青谷　世刹　小玉　松本

29th　中野　高島　桑原　菊谷（宇杉）

30th　池田　桑原　岡田　木村　福原　菊池　吉谷

31st　宍戸　藤岡　宮崎　井汲　河合　斉藤（皿宮　目黒）

32nd　垣見　鈴木　男沢　高橋（大山　小山　石山　堀）

33rd　羽鳥　渡部　松本　東山　小島（河瀬　川島）

34th　荻田　吉田　山田　江沢　加藤(祐)（浜田）

35th　西入　加藤(彰)　森川(直)　森川(丘)　柳沢

36th　中村　武内　江頭　竹林（中山　阿部）

37th　相澤　鞆野　上野　額賀　三木　沖田（防野　小幡　柴田）

1974年度（S.49）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・棒ノ折山	4/21	CL伊東・SL青谷
5月	黒川鶏冠～大菩薩峠	5/4～6	CL青谷・SL小玉
個人	奥多摩・鷹ノ巣山	5/	（女子）
〃	谷川岳・幽ノ沢（雪上訓練）	6/2～3	CL青谷・SL小玉
〃	丹沢・勘七ノ沢	6/9	〃　〃
6月	丹沢・蛭ヶ岳～桧洞丸	6/15～16	CL伊東・SL小玉
個人	丹沢主稜縦走	6/15～16	（女子）
〃	丹沢・葛葉川（夏山準備）	7/14	CL青谷・SL小玉
夏山合宿	北ア・裏銀座縦走	7/21～28	（女子）
〃	〃	7/22～29	
個人	南ア・茶臼岳～北岳	8/4～14	
〃	南ア・白峰三山	8/13～16	CL青谷・SL世利
公式	奥秩父・乾徳山	9/15～16	CL青谷・SL小玉
沢登り	巻機山・割引沢，米子沢	9/21～23	CL伊東・SL遠藤信
個人	奥秩父・金峰山～国師岳	11/2～4	CL小玉・SL三好
〃	大菩薩峠～長峰	11/2～3	（女子）
〃	北ア・爺ヶ岳・東尾根（春山偵察）	11/3～4	CL青谷・SL世利
11月	上越・平標山～万太郎山	11/22～24	CL青谷・SL小玉
スキー合宿	天神平	12/26～31	
〃	〃	〃	（女子）
2月(1)	上越・白毛門山	2/8～9	CL青谷・SL小玉
(2)	那須・朝日岳	2/22～23	〃　〃
春山合宿	南ア・仙丈ヶ岳～早川尾根	3/20～26	〃　〃
			参考・「蒼樹19」他

1975年度（S.50）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・鷹ノ巣山	4/19～20	CL青谷・SL中野
5月	雲取山～飛竜山	5/10～11	CL中野・SL青谷
6月	小金沢連嶺	6/21～22	〃　SL高島
個人	丹沢・葛葉川	7/3	〃　〃
夏山合宿	北ア・朝日岳～爺ケ岳	7/29～8/4	〃　〃
公式	奥秩父・乾徳山	9/21	〃　〃
沢登り	丹沢・水無川本谷	9/28	〃
11月	丹沢主稜縦走	11/22～24	〃　SL高島
スキー合宿	天神平	12/26～31	〃　〃
2月(1)	上越・白毛門岳	2/7～8	〃　〃
(2)	那須・茶臼岳・朝日岳	2/21～22	〃　〃
春山合宿	北ハッ・大河原峠～赤岳鉱泉	3/21～25	〃　〃
			参考・アルバム 他

1976年度（S.51）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・御前山	4/25	
5月	小金沢連嶺～南大菩薩	5/8～10	
〃	奥多摩・棒ノ折山	5/9	（女子）
6月	丹沢・桧洞丸	6/19～20	
〃	谷川岳	6/26～27	（女子）
夏山合宿	北ア・薬師岳～雲ノ平	7/22～27	
〃	飯豊連峰	7/29～8/2	（女子）
個人	北ア・槍ヶ岳	8/18～21	
〃	尾瀬	8/29～31	
9月	奥多摩・鷹ノ巣山	9/17～19	（女子）
沢登り	丹沢・水無川本谷・新茅ノ沢	9/18～19	
10月	奥多摩・三頭山～笹尾根	10/16～17	
個人	奥武蔵・武甲山	11/3	
11月	奥多摩・雲取山～石尾根	11/20～21	
スキー合宿	天神平	12/28～31	
2月	上越・白毛門岳	2/12～13	
3月	那須・朝日岳・茶臼岳	3/13～14	
春山合宿	北八ッ・天狗岳～硫黄岳	3/21～26	
	（その他 モロモロ）		
			参考・「蒼樹21」他

1977年度（S.52）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・川苔山	4/23～24	CL宍戸・SL藤岡
個人	谷川岳・幽ノ沢（雪上訓練）	4/30～5/1	
5月	大菩薩嶺～黒川鶏冠山	5/7～8	
6月	丹沢・塔ノ岳～蛭ケ岳	6/18～19	
夏山合宿	北ア・表銀座～赤牛	7/23～29	
個人	南ア・白峰三山	8/4～13	
〃	北ア・槍ケ岳～穂高岳	8/19～23	
沢登り	丹沢・水無川本谷・セドノ沢	9/24～25	
個人	南ア・早川尾根（春山偵察）	9/30～10/2	
11月	西神山	11/	
スキー合宿	天神平	12/26～31	
2月	八ケ岳・硫黄山	2/	
3月	那須・朝日岳・茶臼岳	3/13～14	
春山合宿	南ア・早川尾根～仙丈岳	3/23～28	
			参考・アルバム他

1978年度（S.53）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	不明	4/23	
5月	大菩薩	不明	
6月	丹沢・塔ノ岳～桧洞丸	6/16～17	
夏山合宿	北ア・祖母谷～白馬～五竜岳	7/25～30	
11月	奥秩父・雁坂峠・笠山峠	不明	
スキー合宿	天神平	12/26～31	
1月	上越・白毛門岳	1/14～15	
2月	八ヶ岳・権現岳	2/10～12	
春山合宿	中ア・木曽駒ケ岳	3/21～25	
			参考・アルバム，食料ノート

1979年度（S.54）

分類	山行名	期日	備考
新歓	奥多摩・御前山	4/22	
個人	奥武蔵・武甲山	4/30	○（山行報告書に記録有）
〃	奥秩父・金峰～雁坂峠	4/28～30	
雪訓	谷川岳・幽ノ沢	5/4～5	○
5月	奥秩父・雲取山	5/12～13	○
個人	丹沢・表尾根	5/13	○
6月	丹沢主脈縦走	6/16～17	○
夏山合宿	北ア・薬師～槍縦走	7/22～29	○
個人	北ア・燕～常念・奥穂	7/24～29	（女子）
個人	北ア・奥穂～蝶	7/30～8/2	
〃	北ア・剣～立山	8/3～8	
〃	南ア・甲斐駒～仙丈	8/11～14	
〃	北ア・立山～剣	8/15～19	
沢登り	巻機山・割引沢・米子沢	9/14～16	○
個人	丹沢主脈縦走	9/23～24	
春偵	南ア・千枚岳	11/2～4	○
個人	日光・奥白根山	11/3～4	○
11月	秩父・両神山	11/17～18	○
個人	南ア・鳳凰三山	11/2～4	（女子）
スキー合宿	不明	不明	
1月	八ヶ岳・編笠山	1/19～20	○
2月	南ア・鳳凰三山	2/9～11	○
春山合宿	南ア・千枚岳	3/19～25	○

1980年度（S.55）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・鷹ノ巣山	4/20	
個人	丹沢・表尾根	4/29	
雪訓	上越・足拍子沢	5/2～3	
5月	奥秩父・雲取～飛竜山	5/10～11	
6月	丹沢・桧洞丸	6/14～15	
夏山合宿	北ア・朝日～五竜山	7/20～26	
個人	北ア・槍ヶ岳～北鎌尾根	7/24～28	○
〃	南ア・甲斐駒～仙丈岳	8/2～6	
〃	南ア・北岳～茶臼岳	8/6～13	
沢登り	安達太良山・鳥川・深堀沢	9/13～15	
個人	皇海山	9/29～30	
〃	奥多摩・本仁田～川苔山	10/11～12	
春偵	北ア・蝶ヶ岳	11/1～4	
11月	奥秩父・乾徳山～黒金山	不明	
スキー合宿	戸隠スキー場	12/25～30	
1月	谷川岳・白毛門	1/24～25	
2月	八ヶ岳・天狗岳	不明	
春山合宿	北ア・蝶ヶ岳	不明	

1981年度（S.56）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・三頭山	4/19	
個人	奥秩父主脈縦走	5/2～5	
5月	大菩薩嶺～小金沢山	5/9～10	
6月	丹沢・東丹沢主脈縦走	6/13～14	
夏山合宿	北ア・燕～槍～薬師岳	7/21～27	
個人	飯豊連峰	7/28～8/2	
〃	北ア・白馬～朝日岳	7/31～8/4	（女子）
春偵	南ア・光岳～聖岳	8/24～28	
沢登り	奥秩父・笛吹川東沢・ヌク沢 鶏冠谷	9/19～20	
個人	奥多摩・御前山	9/23	（女子）
〃	日光・奥白根山	10/31～11/1	
11月	南ア・鳳凰三山	11/21～23	
個人	奥多摩・雲取山～鷹ノ巣山	11/28～29	（女子）
スキー合宿	武尊スキー場（オリンピア）	12/26～30	
1月	八ヶ岳・編笠岳	1/23～24	
2月	上信・四阿山	2/20～21	
春山合宿	南ア・光岳～上河内岳	3/20～26	

1982年度（S.57）

分類	山　行　名	期日	備　考
新歓	奥多摩・大岳山	4/18	
5月	奥秩父・雲取山～飛竜山	5/9～10	
6月	丹沢・表尾根～鍋割山	6/26～27	
夏山合宿	北アルプス・白馬岳～爺ヶ岳	7/22～28	
春偵	八ヶ岳・天狗岳～赤岳	8/28～30	
沢登り	丹沢・水無川本谷，セドノ沢	9/18～19	
11月	日光・女峰山	11/20～21	
スキー合宿	戸狩スキー場（とん平）	12/26～29	
1月	奥秩父・瑞牆山～金峰山	1/14～16	
2月	日光・前白根山	2/23～24	
春山合宿	八ヶ岳・茶臼山～硫黄岳	3/20～24	

山　行　報　告

1974年度　P.14——25

1979年度　P.26——31

1981年度　P.32——45

1982年度　P.46——61

奥多摩・棒ノ折山

- 1974年 4月21日
- CL伊東，SL青谷

今年はごく楽な山という事で候補地を検討し、棒ノ折山に決定した。

4月20日

翌日の天気が心配だが、先発隊が出発。

4月21日

朝から雨。早朝から先生との連絡の結果、一応集合とする。立川では、やはり集まりが悪い、1年が3人と少なかったが、帰るではないのでむりやり決行する。御嶽から先発隊との連絡のため、小玉と泉さんが走る。ごくろうサマ。川井からは雨の中、林道を行き、取付でバンガローを借りることにする。たき火をおこし、どうにか形をととのえた。先発隊を加え、やっとそれらしくなった。　カレーができ、めしがたけるにつれ、なごやかな雰囲気になり、参加した1年生にも楽しいものとなった。帰る時には雨もやみ、林道を気軽にひき返し、車内解散した。

問題提起をしておこう。1. 天気判断の処置　2. 先発隊・後発隊の連絡　3. 水場と小屋の確保

黒川鶏冠～大菩薩峠

- 1974年 5月4日～6日
- CL青谷，SL小玉

4日、裂石から柳沢峠まで青梅街道をあがる。トップが2回も近道を間違え、後から非難の声しきり。無理やり近道を行ったため、最後は堰堤の横のアリ地獄のような急斜面を登らなくてはならなくなる。駐車場の片隅に幕営。

5日、「交響曲英雄」が鳴りひびく中を出発。六本木に荷物をおき、昼食をもって黒川鶏冠山を往復。六本木から丸川峠まではほとんど平坦で、景色はまったく見えず、自然とピッチが上がる。1時間遅く出発したのに、予定より2時間近く早く丸川峠につく。流れの横の幕営地かどうかわからぬ小さな場所を整地してどうにか張る。

6日、大菩薩嶺への登りが今度の山行で唯一の登りらしい登りである。天気は快晴で、雷岩からのまっ白な富士山と南アルプスの山々がすばらしい。一つ一つ山を1年に教える。ひろびろとした石丸峠で昼食の後、今まで楽だった分を帳消しにしようとするがごとく、猛然と下りはじめる。新入部員の1人が遅れだし、しばらくしてふらふらと倒れてしまった。山本ドクターの診察によると軽い貧血をお

こしたらしい。しばらく休ませたが、その後も元気が出ず、荷を軽くして下った。

コースにあまり変化がなく、かなり楽な山行だったが、1年生も雷岩からの景色に喜んでくれ、1年の初めの山行として満足のいくものであった。

丹沢・蛭ヶ岳～桧洞丸

- 1974年 6月15日～16日
- CL 伊東, SL 小玉

いろいろコースを考えてみたが、水がうまく得られない。それなら水ボッカをしようということになり、ひとり5～6ℓの水をいれて、25～30kgをしょった。

15日、藤野につくと、バスは満員で、大きな荷物の我々に入りこむすき間はない。しかたなく一本待つことにする。東野で水ポをいっぱいにし、ずっしりと重くなったザックをしょって歩きだす。2ピッチ目にはかなりバテてしまい、トップについて行けなくなった。2年生としてまったくだらしがないと思ったが、足が思うように前に出てくれない。後で、1年が足をつった時には彼に感謝する。稜線に出て、冷たい握り飯をかじる。今まで暑かったのが、日が落ちるとたんに寒くなる。姫次の展望台に幕営。

16日、6月にもかかわらず、快晴。まだ水が残っているため、原小屋では補充せずに通り過ぎ、蛭ヶ岳を越える。かなり暑く、快晴が恨めしく思われる。神ノ川乗越で、水場までおりて昼食をとる。今まであまり飲めなかった水をたっぷり使ってフランスパンを流しこむ。桧洞丸の登りでは、男子は全員バテ気味。山本氏によると、歩くとき大きな声を出すことは、医学的に見ても効果があるとのこと。それを聞いて一段とファイトが大きくかかる。トップのペースも調子よく、だれも遅れることなく頂上へ。下りでは心配された世利のひざが悪くなり、3年に荷物をかわってもらった。

女子部に経験者がいないため、この時点では男女合同の夏山合宿を考えて女子も参加したわけだが、男子に比べ女子の元気さが目立った。体力不足が痛切に感じられた山行ではあったが、夏山トレーニングとしての目的は達成できたと思う。

この山行の前に、1年2人が林間学校に行きたいという理由で部をやめ、早くも男子2名女子1名という心細い人数になってしまった。合宿を遅らしてでも、とどまらせるべきだったのだろうか。彼らも夏山に来れば、その魅力に充分魅せられただろうと思うと残念である。

葛葉川

- 1974年 7月14日
- CL青谷、SL小玉

雨のため増水しており、山荘周辺でちょっと遊ぶだけで、遡行は断念した。

北ア・裏銀座縦走

- 1974年 7月22日～29日
- CL青谷、SL松本、世利、増田、中野、OB山本泉

7月22日

女子とは半日遅れの早朝発となる。小玉の突然の中止により参加者は現役5人となった。大町でタタリの買物の後バスで七倉に入る。気の狂いそうなトンネルと大ダシブの行きかう中を濁にたどりつく。1ピッチで堰堤上に出るが、突然の通り雨にあわてて幕営する。取り付きまで行く予定だったのが、通り雨ごときも判断できない事に、晴れた空を見上げて反省する。夏山初日の興奮のためか、全員が寝ぼけて9時半を3時半ではないかとまちがえる。ダシブがうるさい。

7月23日

ブナ立て尾根の取り付きに5分ほどで着く。天気はよい。最初の2ピッチ増田が遅れ気味だが、4ピッチ目から快調になる。その名の通りブナの林の中を徐々に近づく稜線目ざして登る。やがて獨沢の沢音も消え、三角点も過ぎ最後の登りは声をかけながら登る。稜線に出て5分程で、烏帽子小屋の天幕場につく。烏帽子岳へは、雪渓で遊んだ後アタックしたが、雨でビシャビシャで視界もきかず、惨々。天幕に帰ってふるえていた。

7月24日

真っ暗な中をやや遅れて出発。三ツ岳までのやせ尾根に手こずりながら、次第に明るくなる。天気はさえないが四方の展望はよくきく。野口五郎岳までは簡単につく。初めて槍を前方に見、これからの行程に意欲が新たにわく。360°の展望を満喫して出発。入山以来ずっと富士高とぬきつぬかれつを演じてきたが、東沢乗越で再びぬき赤岳の登りとなる。やせた尾根で緊張しつつ登るが、あとを追う富士高の大人数を見てはゆっくりしているわけにもいかず、意識過剰気味にニヤけながらファイトをかけて水晶小屋まで登りきらせた。水晶アタック後眼下の雲ノ平目ざすが、風が強く雨まじりで、その上ガスっている。1年は元気なくどうしようもない。ハイマツをこぎ、雪渓をすべり降りてフラフラ気味でたどりつく。女子がいた。劇的対面。疲れた体にレモネードはうまかった。雨まじり、寒い。

7月25日

朝から雨。停滞の雰囲気だが、8時から祖父岳の雪渓で雪訓をし、雲ノ平を散策。時折、水晶・薬師が姿を見せる。帰幕後、今までの陰鬱なムードを一新するかのように、雲が切れ、青空がのぞいた。撤収！ 祖父沢を下ることにする。重荷の沢下りは特に悪場はないが、神経、体力ともに疲れる。軽く見ていたが、コースタイムの2倍近くかかってようやく祖父平へ。今山行のミソであるこの祖父平。人多い北アといえども、まさに別天地。テント4張。女子と共に花火大会をやってから眠りにつくが、ツェルトから顔を出して草のにおいに包まれ見上げる星空は何にもまさる美しさであった。

7月26日

快晴の中、黒部五郎岳が朝日に美しい。黒部本流へ入ると徒渉が多くなり、幾度となく水につかる。五郎沢出合は、はっきりしていて広くて美しい。トップは2年が交替し、その後をついていく。ルートファインディングのよい勉強だ。中流くらいから小さな滝があらわれるが、特に悪場はない。青谷がすべって手をけがする。失態。やや傾斜を増すと、左俣を分けて平凡なゴーロとなる。右手には五郎カールがすばらしい。太陽の下、限りなく広々とした五郎平に到着。元気だ。三俣蓮華までは3Pで快調に登る。女子隊を後に双六へ向うが、ガスの中、広い稜線が続く。一度ルートを見誤ったが事なく、双六岳をまき、双六小屋へ向う。沢の疲れが出て到着後はぐったり。皆、元気がない。

7月27日

徹収が遅い。日の出を左に見ながら、身の引き締まる思いで樅沢岳を登る。槍・穂高の黒々としたシルエットが眼前に開けた。目的地は近い。急な登降もなく、快調に進む。千丈沢乗越の前は少し悪い。転落者のようだ。軽い昼食後、槍へ。急なガラ場だが意外に楽に槍の肩へ着く。肩は人でごった返していた。天気のくずれを恐れて山頂目ざすが、人の尻を見て往復すること2時間。とにかく人の多さにはまいった。時間的に余裕なく、南岳方面は断念して、槍沢を下り天狗平へ。第2の別天地へ至る。豊富な雪渓と、槍・穂の稜線。人影もなく、槍沢の混雑からは想像もつかない。夕飯の絶品のうまさもあって、全く言う事なし。

7月28日

朝から霧。今日は一の俣から常念乗越。気はゆるめられない、槍沢を一気に下る。途中、松本が落石してハッとさせた。いざ一の俣。その出会に立った時、無念の立札。通行不能である。いろいろな場合を検討すること一時間。横尾に張り、蝶往復を決定する。世利が膝を痛めている点も考え合わせねばならない。横尾到着。のんびりムードで気抜けした感じは避けられない。

7月29日

朝2時に起床して、世利、泉氏を残してアタックに出る。懐電を頼りに樹林帯の急登だが、空身で苦にならない。森林限界付近で空が白みだすが、ガスで視界はきかない。稜線はガスが飛んで、時折視界が開ける。東の空は美しく、遠く浅間が見える。槍穂の裾が荒々しい。無念の常念も姿を現わした。夏山も最終日である。風が吹きすさんで非常に寒いが、最後の稜線に立ってすぐ帰る気にはなれない。1年は岩かげでちぢこまり、2年は少し動きまわった。1時間ほどいて、寒さに耐えかねて下山。かけ下れば、天幕も徹収され、あとは平坦な道を上高地へ向かうだけだった。途中、明神池に寄る。最後のピッチで1年がバテたのは、いただけない。見上げる穂高が異観を呈していた。タクシーで帰途につき、目ざめた時には、まさしく真夏の下界があった。

今年の夏山は最後に変更があったものの、変化あるコースに満足のいく結果を得ることが出来た。天幕一張もいいが、やはり人数のタイに越した事はないという事を痛感した。　（青谷記）

- 7/22 新宿6:30 — 信濃大町 — 葛温泉12:50 — 濁14:45 — 幕営地15:55
- 7/23 発5:15 — 三角点下9:05 — 鳥帽子小屋12:05
- 7/24 発4:00 — 野口五郎岳7:20 — 水晶小屋11:10 —（水晶岳往復）— 13:15 — 雲ノ平15:30
- 7/25 発14:15 — 祖父平18:40
- 7/26 発5:50 — 五郎平9:00 — 三俣蓮華岳12:15 — 双六小屋14:27
- 7/27 発4:55 — 千丈沢乗越8:37 — 槍の肩10:20 —（山頂往復）— 13:05 — 天狗平15:05
- 7/28 発7:20 — 一ノ俣小屋9:47 — 横尾12:30
- 7/29 発2:35 — 蝶ヶ岳5:00 — 横尾8:05 — 明神池11:02 — 上高地12:50

爺ヶ岳東尾根（春山偵察）

- 1974年 11月3日～4日
- CL青谷，SL世利

春山決定までの経緯を述べてみたい。春山を今年度のメインとする事で一致。形式としては縦走よりも一つの大きな山へ行くことを考えていた。今年度は2年5人、1年1人という事で機動力もあり、行動は全員一致を原則と考えた。随一の論点は果してザイルを使用すべきか否かであった。この点が山域のレベルを決定する。様々な意見をかわすのち、OBにたよる山行はしない。又、実戦に使えるまでの練習が出来ない。命をかけたくない。等々により、我々のレベル内の山行を行うことにした。

今年はぜひ南アに行きたいということで、当初、仙丈地蔵尾根を考えたが学校側からの反対で断念。過去に中止の例があるからだ。しかし無理ではないと思う。次に北岳や塩見岳が出たがこれはもう1つの研究不足と方針に合わない事で除外。一資料にたよる結果となった（このへんは実に計画が甘いのだが。）爺ヶ岳は偵察の末、危険ヶ所があるためまたもや断念。やはり早川尾根や八ヶ岳、奥秩父が限界であろうか。当初からりっぱな山へは行きたい。という思いだけは強く、しかしながらぜひここへ行こうという対象を深く追いつめる事が数々の変更を生んだ原因であったと思う。後輩の諸君には信念をつらぬき通す山行を行なってもらいたい。

結局、早川尾根を以前とは逆コースをとり仙丈アタックを取り入れる事に決定したが、記録は後に載せるとして、爺ヶ岳東尾根偵察の状況を述べたい。

11月3日

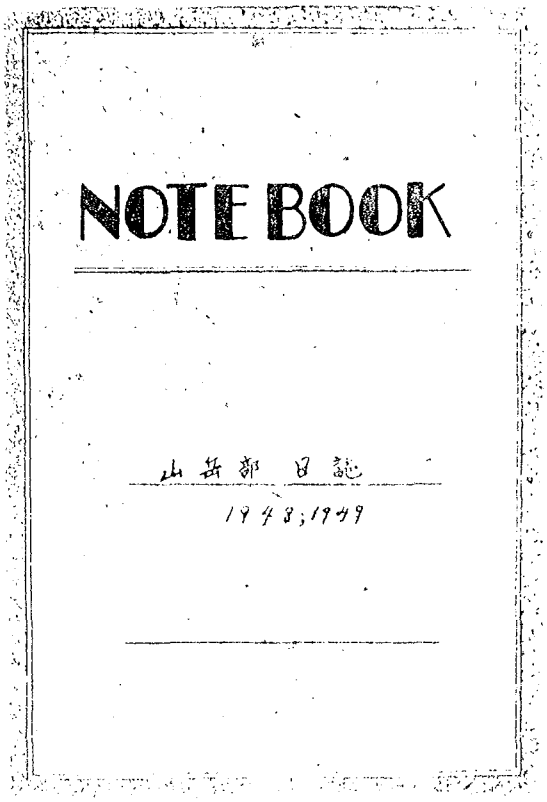
女子と共に出発の予定が、世利の遅刻で同乗せず0時過ぎの列車で発つ。扇沢まではスムーズに到着。新雪と紅葉と青空の美しさはすばらしい。爺ヶ岳南尾根を3時間余りで登り種池小屋付近に天幕を張る。雪は10cmぐらいであった。翌日の行動のために爺ヶ岳頂上へ行き東尾根を見る。意外にもしっかりとした踏み跡があり、登って来た人もいたのでひとまず安心する。この時期の北アは又すばらしく、爺ヶ岳頂上からは360°の展望が開け白銀に輝く山々が望めた。山容は鹿島槍と比較して劣るが、まずまずだ。

11月4日

朝早々にアイゼンをつけて東尾根に入る。東尾根は大体3つの部分から成る。頂上から2300mまでの斜面。ジャンクションピークまでのやせ尾根。それ以下の特に問題

のない尾根。しかし全体的にやせているのが特徴。頂上直下の斜面は意外に急で雪がべったりついた時の困難を思わせる。灌木帯の急下降後、急にやせ尾根となる。ところどころにギャップがありザイルの必要性を感じる。ナイフリッジになることが予想される。要所要所に伊東さんの助力を得て赤布をつけるが、実は赤布のオンパレードで、至るところにすでについている状態だ。やせ尾根をすぎると尾根も広くなり、2～3の上下をくり返す楽な下りとなる。2股に出て鹿島部落側の尾根をたどる。この付近はどこでもサイト場になる。尾根を忠実に進み、標高差300mの急斜面を下って赤布の中を部落におりたつ。この斜面の登りは苦しくなりそうだ。春山の場合部落から尾根上もしくは、2股まで。第2日はジャンクション下まで。3日目アタック又は2300mまで荷を上げる。4日目下山又はアタック後下山もしくは頂上を経て南稜下山などが考えられたが、方針と検討の結果、やせ尾根でのザイル使用が問題となり、結局断念することになった。

以後、西明でこの尾根を登った模様だ。



「都立十中山岳部」これこそ我が部最初の名称である。上は現在部室に保存されている中で最も古い記録帳で、写真も交えて詳しく記録されている。それによれば、学生服、学帽、それにゲートル巻きといった格好で、戦争直後昭和二十一年の高水三山登山をスタートに、奥多摩、奥秩父、丹沢、南アルプス、上州、東海方面と実に多方面で活発な活動が行われている。当時の部員は安藤英彌氏（なんと西高一期!!）、南波貞敏氏（これまた二期!）他多数で、彼らの紀行文は非常に興味深い。部員必読の価値ある宝とも言える一冊だ。

上越・平標山～万太郎山

- 1974年11月22日～24日
- CL青谷、SL小玉

11月山行はボッカややぶこぎ山行などの案もあったが、上越方面は例年より雪が早く、春山を充実させるためにもこの山域を計画した。

11月22日・23日

上野を夜汽車で出発。越後湯沢の駅でバス時刻まで少し仮眠する。元橋までバスで入った。

1P目で早々に雪が出て来、スパッツをつける。天気も回復し時折日も差してきて、苗場山が遠望される。松平山まではダケカンバ帯で時々雪が深く、松平山に至ると忠実にそう深くない雪の尾根をたどる。いやらしい雪質の斜面をひと登りで平標山に至った。去年の白岳登頂以来久しぶりの雪山の頂である。数日前に雪崩さわぎのあった仙ノ倉山までの稜線はだだっ広く、風で雪が飛んでいてそのおもかげはなかった。エビのしっぽのできた仙ノ倉山の頂上に至り、先に進む予定であったが状況からここでストップにする。頂上直下北側の平坦地にテントを張る。案の定すぐさまガスにおおわれた。

11月24日

ガスが濃く天候待ち。朝食後のこのこまわりを出歩いているうちに、急にガスが晴れ、視界がさえわたった。時期到来といいたいところだが、時間も遅く、暗雲が西の空にあるので万太郎～吾策新道のコースを断念、雪訓して下山とする。平標までのだだっ広い尾根を気持ちよく歩く。渡辺さんがここぞとばかりスキーをはいたが、皆の失笑をかいました。実はうで前ではなく、雪質が悪いのでした。下山道は平標新道をとった。途中柔らかい斜面で雪訓をしたものの、あまり効果はあがらなかった。新道はややせた尾根上で、雪もくさっており、いやな下りである。河原からは長い林道で、途中からはどしゃ降りとなった。

天幕生活の不慣れが目立ったが、この山域はなかなか魅力的であった。

上越・白毛門山

- 1975年 2月8日～9日
- CL青谷, SL小玉

2月8日

西高を午後発ち、土合には暗くなる頃着く。ヒュッテ下の河原をサイト場にする。意外に暖く設営も早く、弁当を食って早々に寝る。

2月9日

暗いうちから出発。雪。先行者がいるうえに、気温が高いせいで雪も固まり、ラッセルも期待したほどない。どうせやるなら道なき道を行くべきであったか。松ノ木の頭に出る頃やっと先行者にも追いつき、腰下のラッセルをする。風もあり休憩場所は寒かった。頭からは稜線を忠実にとり、直下の大斜面を登り切ると、頂上への小突起に至った。やせた尾根を一投足で頂上。展望もなく、笠ヶ岳側のゆるい斜面で昼食をとる。時間的に早く雪訓できる状態ではないので、笠ヶ岳をめざす。ガスと風の悪条件下の登高は、ルートファインディングのよき練習場となった。いくつかの登り下りを続けるうち、最後の大斜面を登り切ると笠ヶ岳に至った。風が強く早々に引き返す。また一つの訓練の場を得た。さきほどの大斜面の下る方向を見失ったのだ。ストック2本の目印も空しく、ただガスと広い空間。ガスの切れ間を待つ冷静さと山野氏の判断で方向を得ることができた。白毛門に至る頃はいつのまにか快晴になり、真っ青な空と白のコントラスト、谷川東面も顔を見せ、風もなく、雪山最高の条件が現出した。満足感にひたりながらぽかぽかと、尾根をかけ下った。ラッセルが意外にできなかったものの、よき経験を得た山行であった。白毛門は手頃な山である。

那須・朝日岳・茶臼岳

- 1975年 2月22日～23日
- CL青谷, SL小玉

2月22日

西高を午後出発し、湯本で山野氏を迎える。タクシーで大丸温泉まで入るが、天気は悪く、吹雪模様、サイト場は捜したあげく、昨年と同じ場所、階段を登り切った左側にした。

2月23日

昨日がうそのように晴れ渡った。雪山では実に天気にめぐまれている。2Pで峰の茶屋に着く。途中道をはずしたものの、特

に問題なし。一息ついた後 朝日岳に登り始めるが、雪崩の危険もあるので稜線伝いにルートをとる。急な斜面にアイゼンが小気味よくきいて、練習にはもってこいである。途中斜面のトラバースも雪もやわらかく、特に危険も感ぜず通過。意外に早く山頂に至った。雪が降り出すものの、正面の岩壁をながめながらの昼食は気分がよい。帰路は、小玉が峰の茶屋上の斜面で雪質も悪く、3mほど滑落し、はっとさせた。茶臼岳へは一直線に頂上をめざし道なき斜面を硫黄臭とガスで果して行きつくかと思われたが、ぽっかり一角に出た。

帰路は一般道を通り、峰の茶屋付近で雪訓を行った。春山への最終段階であったが、アイゼン歩行に成果があった。アタックであるのでどうしても楽になりがちだ。声をよく出すようにしたい。

仙丈岳～早川尾根

- 1975年 3月20日～26日
- CL青谷, SL小玉, 松本, 三好（2年）中野（1年）, OB上遠野, 山野

3月20日

連休初日のためかスキー客でごった返し、とにかく散々な状態で列車に乗る。

3月21日

寝不足は避けられない。伊那北は登山者だらけで、意気消沈。バスから仰ぐ中アの山並と霧氷美しい山並がやっと春山らしくした。丹渓山荘までは雪の積もった河原を、着実に3Pで行く。L後、八丁坂にかかるが堅実なペースで意外に楽に乗り切る。夜行の疲れがありながらも、快調に進み、峠を越えて北沢沿いに幕営する。寝不足のため、すぐ眠ることにした。

3月22日

充分な睡眠とはいえ、まだ疲れが残る中で起床。アタック日和の予想とはいえ、はるか頭上の仙丈上部は雲にかくれている。晴れることを期待しつつ、初のジャイアント登頂に、今春山合宿の成否を問う気持である。峠に出て県界尾根をゆく。樹林帯の意外にきつい登りである。多くのパーティーが今日のアタックを敢行している。5合目付近から、背後に駒やアサヨの峰々が雄々しい姿を現わす。森林限界をあっけなく過ぎるが意外に風が強い。小仙丈の斜面の下に達するが、上部に吹き巻く風は、この先の行程の困難さを思わずにはいられない。少しツェルトで待った後、この斜面にとりつくが、息もつかない風に立ち往生。やっとの思いで小仙丈に達する。ツェルトで風の止むことを期待してうずくまっている。快晴、360°の展望が開けるも、風の威力のもと、我々は展望を楽

しむ暇もなく、追いたてられるように退脚を余儀なくされた。樹林帯に戻った後、ほっと息をつくと共に、雪煙立つ稜線をうらめしく見上げた。かけ下って帰幕すると、上遠野さんが着いていた。予想通り、イグルー作りがはじまる。

3月23日

仙水峠までは舗装道路並のよく踏まれた道を行く。荒々しい摩利支天峰を背に、栗沢の登りに取り付く。頂上は意外に近い。気を引き締めてかかる。出来るだけ尾根沿いをラッセルしながら進む。1P半ほどで樹林帯を抜けるが、真近にせまる頂は思うように近づかず、バテ気味でR。少しで栗沢ノ頭に至る。今日の難所は意外に楽に終った。アサヨ峰まではやや岩稜帯で、途中大休止をとる。カラスが笑う。高曇からガスってくる。アサヨの頂上を通り、行手に1,2の天幕場を見当つけながらさらに進む。もう人影もなく、膝下のラッセルを続けていく。小玉が遅れ出し、時間も考え合わせ、ミヨシ頂上を天幕場に決定。夕食までのんびりする。

3月24日

OBにかなり注意され、反省だらけ。今日も快晴。北岳が高い。ミヨシの下りは意外にやせており、ルートを見誤った。樹林帯ながらも左側への雪ピの張り出しがある。とその時、ドンという音とともに足下が割れ、三好、小玉がすべり落ちる。あっという間の出来事だったが、2人とも木にひっかかって大丈夫。ハッとする場面だった。小さな上下を繰り返し、樹林帯に道を開いて行く。時折腰まで落ちこんで苦労する。しかし、まだ予想以下のラッセルだ。広河原峠に酒高の赤布を見る。赤薙沢ノ頭を越えるのに意外に時間を費やす。中野がバテはじめ、元気がない。右手に北岳が青空をバックに高く、仙丈、甲斐駒、そして越えてきた早川尾根の上下が疲れを忘れさせる。しかし、前方には高嶺が名のごとく、はるかに高い。気持ちよい白鳳峠を過ぎ、高嶺の登りにかかる。取り付くと以外に楽で、アイゼンをきかせ、掛け声をかけながら、1Pで肩まで至る。特に危険な箇所もなく、難なく高嶺に至った。四囲の展望はすこぶる良く、またしても頂上に天幕場を設営した。

3月25日

風が強く、徹収が遅れる。今日は、御座石までの下山を決定した。赤抜ノ頭まではイヤな上下で、所々に小さな雪ピの張り出しがある。1Pで地蔵を眼前にする。ここで大休止。地蔵及び観音をアタックする。白峰三山、南ア北部の山並みを一望するそのすばらしさは、今春山の見収めに、充分価するものだった。この稜線にもう一泊したい。そんな気持ちが広がったのは、私一人ではあるまい。L後、下山にかかる。くさった雪に春の日ざしが暖い。いや暑いくらいである。燕頭山のトラバースにやや緊張し、長い尾根を

はるか下の御座石目ざす。標高差1500m余りの急下降である。アイゼンをはずした最後のピッチ、氷った道に中野がすべり落ちるアクシデントもあったが、無事御座石鉱泉にたどりついた。翌日、帰る事を決定し、幕営する。氷った堰堤をOBのザイル確保で登らせてもらう。温泉につかり、最後の晩を楽しくすごす。

3月26日

マイクロバスにて穴山駅に至る。春の日ざしの中、我々が縦走してきた山々、甲斐駒、アサヨ峰、鳳凰山が高くのぞまれた。

合宿中は、我々の心構え・態度が甘く、数々の問題点を感じた。OBには、いろいろ指摘され、日頃甘くなりがちだった山行に、新たな自覚を我々に与えた。そのご指導に改めて、ここで感謝したい。

（青谷記）

- 3/20 新宿 23:30 —
- 3/21 伊那北 6:33 — 戸台 7:50 — 丹渓山荘 11:15 — 北沢峠 14:40 — 幕営地 14:50
- 3/22 発 5:45 — 5合目 7:30 — 小仙丈岳 9:35 — 帰幕 13:15
- 3/23 発 6:05 — 仙水峠 7:22 — 栗沢ノ頭 9:35 — アサヨ峰 11:17 — ミヨシ 12:05
- 3/24 発 6:35 — 広河原峠 9:20 — 赤薙沢ノ頭 11:36 — 高嶺 13:32
- 3/25 発 6:43 — 赤抜ノ頭 7:46 — （観音岳往復）— 発 10:30 — 御座石鉱泉 14:35
- 3/26 発 8:45 — 穴山駅 9:42

恐怖!! 西沢渡の蛭

僕が一年の時の夏 春山偵察で南アの南部に行ったのだが 雨の中聖平から樹林帯を西沢渡へ下り、そこから延々7時間林道を歩いて本谷口に着いた。そして、おもむろに雨具を脱ぐと、な、なんと、白いニッカポースが、真っ赤に染まっていたのだ。ギェーッと思ってそれを脱ぐと両足のふくらはぎに蛭が数匹吸いついていた。手で引きはがそうとすると、ゴムのように 20cm にも伸びて、容易に離れない。やっとのことで捨てて踏みつけると、自分の血が四方に広がった。どうやら樹林帯で落ちて来たようなのだが、その後も、靴の中や、服のあちこちから次々に発見。最後まで悲惨な山行だった。

奥武蔵・武甲山（個人山行）

・1979年4月30日
・CL 羽鳥（2年），本庄，山田，吉田
浜田，江沢，加藤（1年）

・5月7日に頂上が無くなると聞いてあわてて行ったのだが頂上で悪天に見舞われ残念だった。名郷から歩き始めてすぐ雨が降り出す。武甲山まで降ったりやんだりでそれほどひどくなかったが、山頂へ着いたとたん霙をともなった雨が激しく降り出し、展望のないまま即刻下山（西参道）する。山ノ神を過ぎたあたりから雲一つない晴天となり秩父の町並がよく見えた。横瀬の駅から見た武甲山は痛々しく、駅前の菓子屋のおやじもしきりに三菱と秩父セメントを非難していた。

・6:00 所沢集合 6:07 — 6:30 飯能 7:18 — 8:20 名郷 8:20 — 11:05 大持山（L）11:45 — 12:10 小持山 12:15 — 13:15 武甲山 13:25 — 14:20 山ノ神 15:00 — 16:55 横瀬（解散）

谷川岳・幽ノ沢（雪訓）

・1979年5月4日～5日
・CL 羽鳥，SL 渡部，松本，東山
指導OB：遠藤（彰），久米

・西明登高会の新人訓練と重なったので、沢山のOBといっしょに活動する事になった。参加は青谷，中野，中尾，池田，岡田，木村，井汲，藤岡，河合の各氏。雪が例年より少なく、雪訓は出合から少し奥まった所で行った。

奥秩父・雲取山

・1979年5月12日～13日
・CL 羽鳥，SL 渡部，松本，東山（2年）
山田，吉田，荻田，浜田，江沢，加藤，本庄，星野（1年）　垣見（3年）

12日
西高 12:40 — 13:49 立川 14:14 — 15:25 奥多摩 15:40 — 16:20 日原鐘乳洞 16:30 — 16:55 八丁橋（幕営）

13日
起 4:00 — 発 5:55 — 10:35 小雲取の肩（雲取往復）12:45 — 13:30 七ッ石山 13:35 — 13:48 七ッ石小屋 14:00 — 15:45 留浦 15:47 — 16:15 奥多摩（解散）

丹沢主脈縦走

・1979年 6月16日 ～17日
・CL 羽鳥，SL 渡部、東山、川島
小島（2年）、吉田、山田、荻田、浜田
江沢、加藤、星野（1年） 男沢（3年）
遠藤(彰)、条原（OB・OG）

・ 16日
西高 12:40 — 13:09 下北沢 13:21 —
14:30 渡沢 15:10 — 15:25 大倉 15:42
— 19:00 幕営地

・ 17日
起 4:30 — 発 6:35 — 7:35 塔ヶ岳 7:55
— 9:40 丹沢山 10:05 — 12:55 蛭ヶ岳
13:50 — 14:52 原小屋 15:20 — 18:50
東野 19:25 — 20:10 藤野（解散）

北ア・薬師岳 ～ 槍ヶ岳

・1979年 7月 22日 ～ 29日
・CL 羽鳥，SL 渡部、東山、松本（2年）
吉田、山田、荻田、江沢、加藤、浜田
（1年）、垣見、鈴木（3年）、久米(OB)
菊池先生

・ 23日 〔曇り〕
上野(22日) 20:53 — 4:50 富山 5:23 —
6:05 有峰口 6:24 — 7:29 折立 8:23
— 15:30 薬師峠（幕営）

・ 24日 〔霧〕
起 4:00 — 発 6:00 — 7:00 薬師岳山荘
7:10 — 7:45 薬師岳 9:00 — 9:55 帰
幕

・ 25日 （停滞） 〔大雨〕
起 2:00 — 停滞決定 6:00

・ 26日 〔曇り〕
起 2:00 — 発 3:55 — 5:50 北の俣岳
6:15 — 9:40 黒部五郎岳 9:55 — 11:20
黒部乗越（幕営）

・ 27日 〔晴れ〕
起 2:00 — 発 3:57 — 6:15 三俣蓮華
岳 6:15 — 7:57 双六小屋 8:20 — 12:50
千丈乗越 12:50 — 14:23 槍ノ肩 15:20
— 15:40 殺生ヒュッテ（幕営）

・ 28日 〔曇後大雨〕
起 3:00 — 発 4:48 — 5:43 槍ヶ岳 5:45
— 6:48 帰幕 7:40 — 10:05 旧槍沢小
屋・停滞決定 14:00

・ 29日 〔雨〕
起 2:00 — 蟻あきらめ 決定 — 発 7:35 —
8:35 — の俣 8:45 — 9:35 横尾 10:00
— 10:45 徳沢 10:55 — 12:20 上高地
— 15:05 松本（解散）

巻機山・米子沢、割引沢

・1979年 9月14～16日
・CL 羽鳥、SL 渡部、東山、松本(2年)、吉田、山田、浜田、荻田、加藤、江沢(1年)、山野、松本河合、藤岡(OB)

・15日
上野(14日)22:11 — 3:33 六日町 4:00 — 4:35 清水 4:50 — 5:10 幕営地 6:30(幕営)— 7:15 割引沢取付 7:30 — 13:05 割引岳 13:20 — 15:50 帰幕

・16日
起 3:00 — 発 5:00 — 5:50 取付 6:05 — 7:25 スダレ上 7:40 — 10:05 2条 20m上 10:15 — 12:00 巻機小屋 12:20 — 14:00 帰幕 14:45 — 15:10 清水 15:20 — 16:00 六日町(解散)

奥秩父・西神山

・1979年11月17～18日
・CL 羽鳥、SL 渡部、松本、東山(2年)、山田、吉田、荻田、浜田、江沢加藤(1年)、岡田(OB)

・17日
西高 12:35 — 13:30 池袋 13:40 — 15:29 西武秩父 16:00 — 16:55 小鹿野町 17:33 — 18:10 坂本(幕営)

・18日
起 3:30 — 発 5:35 — 8:43 八丁峠下 8:54 — 10:14 西岳 10:30 — 12:20 東岳 12:35 — 13:10 西神山 13:25 — 14:20 清滝小屋 15:00 — 16:58 出原 17:25 — 18:00 小鹿野町役場 18:11 — 18:45 西武秩父(解散)

八ヶ岳・編笠山

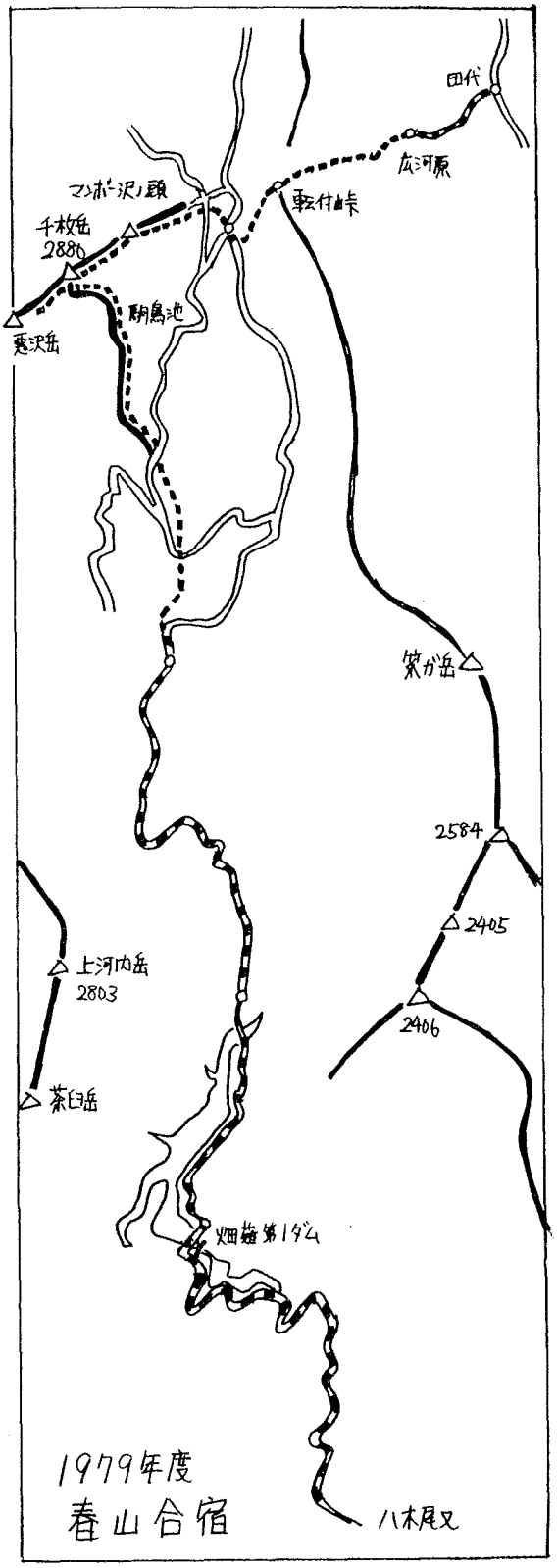
・1980年1月19～20日
・CL 羽鳥、SL 渡部、東山、松本(2年)山田、吉田、加藤、江沢、荻田、浜田(1年)、山野、池田(OB)

・19日
西高 12:45 — 13:45 八王子 14:03 — 15:58 小淵沢 16:15 — 18:40 幕営地

・20日
起 4:00 — 発 5:40 — 9:30 わかん装着 9:40 — 10:20 編笠山 10:50 — 11:25 青年小屋前 11:40 — 12:00 編笠山 12:15 — 13:25 雲海 13:40 — 14:10 帰幕 15:00 — 16:08 小淵沢(解散)

南ア・鳳凰三山

・ 1980年2月9～11日
・ CL 羽鳥，SL 渡部、東山、松本（2年）
山田、吉田、江沢、荻田（1年）
青谷、藤岡（OB）
・ 10日
新宿（9日）23:55 — 3:46 穴山 5:00 — 6:00 御座石鉱泉 6:35 — 7:35 西平 7:45 — 10:50 燕頭山 11:20 — 13:50 鳳凰小屋（幕営）
15:15（雪訓）16:30
・ 11日
起 3:30 — 発 6:20 — 7:25 地蔵岳 8:05 — 9:25 観音岳 9:40 — 11:20 南御室小屋 11:35 — 13:35 杖立峠 14:00 — 14:50 夜叉神峠 15:05 — 15:28 夜叉神バス停 16:20 — 17:15 甲府（解散）



南ア・千枚岳

- 1980年 3月19日～25日
- CL羽鳥、SL渡部、東山、松本(2年)、吉田、山田、荻田、江沢(1年)、山野氏、中尾氏(OB)

3月20日

- 新宿(19日)23:55—2:50 甲府 5:11—6:35身延 7:10—8:30 田代入口 8:48—9:52 広河原発電所 10:05—11:35 八丁峠 11:50—16:25 転付峠(幕営)

3月21日

- 起 3:00—発 5:05—6:13 二軒小屋 6:40—13:20 マンボー沢の頭

3月22日

- 起 3:00—発 5:40—10:00 千枚岳(幕営)

3月23日

- 起 3:00—(撤収してから悪沢アタック発)7:10—10:32(3033m地点、頂上断念)—12:30 千枚岳 12:50—14:50 千枚小屋 15:05—17:45 幕営地(駒鳥池から約5分下った所)
- 千枚頂上から小屋、小屋から池、池からーとすべて道をはずしてしまう。尾根が広く新雪でわかりにくかったせいもあるが情けない。偵察の重要性を思い知らされる。

3月24日

- 起 5:00—(ルートが見つからず発遅れる)7:45—8:45 蕨段付近 10:15(ド快晴の中ルートを失う)—13:40 椹島 13:45—16:40 幕営地(林道脇の河原)
- Fireを囲んで春山最後を飾る。就寝は各自。俺は渡部と火の側で野宿。凍ったシュラフが溶けて足元が冷たい。寒さで目を覚ますと星の動いているのがよくわかる。シュラフに入ったのは 1:00A.M.ごろ。

3月25日

- 起 5:00—発 7:00—9:15 畑薙ダム 9:30—13:55 八木尾又—18:20 静岡(解散)
- 途中でがけくずれがあってバスが来ない。ダムの事務所で加藤に連絡する。山野さんの奥さんから連絡があったそうだ。今日の運行は止めたというので八木尾又まで歩くことにする。湖の淵は支流が流れ込むたびに入り込んでいて、地図で見るよりずっと長い。第2ダムの所でOB2人が音を上げて、そこのオッサンにタクシーを呼ばせてくれと頼むがついに電話を貸してはくれなかった。

途中、大井川鉄道に乗りたいというOB2人と別れる。しかし八木尾又までが長かった。合宿のダメ押しにはしんどすぎる。がけくず

れは八木尾又から井川へ向ってすぐの所だった。土砂を乗り越えてバスが進む。なんだ、たいしたことはない。このために4Pも足をひきずったのかと思うが腹は立たない。歩き通した充実感がうれしかった。（羽鳥記）

北ア・槍ヶ岳北鎌尾根

・1980年 7月24日 ～28日
・CL 井汲，SL河合，宍戸，斉藤
（以上 31期 OB）
羽鳥，渡部 （33期 西高3年）
・当初、西高3年の個人山行として計画し、OBの同行を願ったが、現役の個人山行としては技術的に無理ということで、OBの夏山合宿に現役が同行するという形になった。従ってOBは入山に北鎌ルートをとりそのまま北穂に行き、滝谷で登はんをやり、現役は一足早く槍沢から下山した。

7月24日
・新宿 22:30

7月25日
・信濃大町 ― 七倉 6:20 ― 7:10 高瀬ダム下 7:25 ― 7:50 高瀬ダム上 8:40（宍戸さんのビブラムがはがれる）― 9:28 Lunch（林道脇）10:20 ― 12:10 湯俣 12:40 ― 14:45 千天出合（幕営）

7月26日
・起 2:00 ― 発 4:25 ― 4:45 つり橋（流されてワイヤーだけ。確保されて綱わたり。）6:19 ― 8:10 北鎌沢出合 8:40 ― 11:55 稜線 北鎌のコル（幕営）

7月27日
・起 3:00 ― 発 7:25 ― 9:25 独標下 9:40 ― 11:30 独標 11:45 ― 14:25 北鎌平下 14:40 ― 16:15 槍ヶ岳 ― 17:00 殺生ヒュッテ

7月28日
・槍沢を下って 12:00 上高地

新入生歓迎会
三頭山

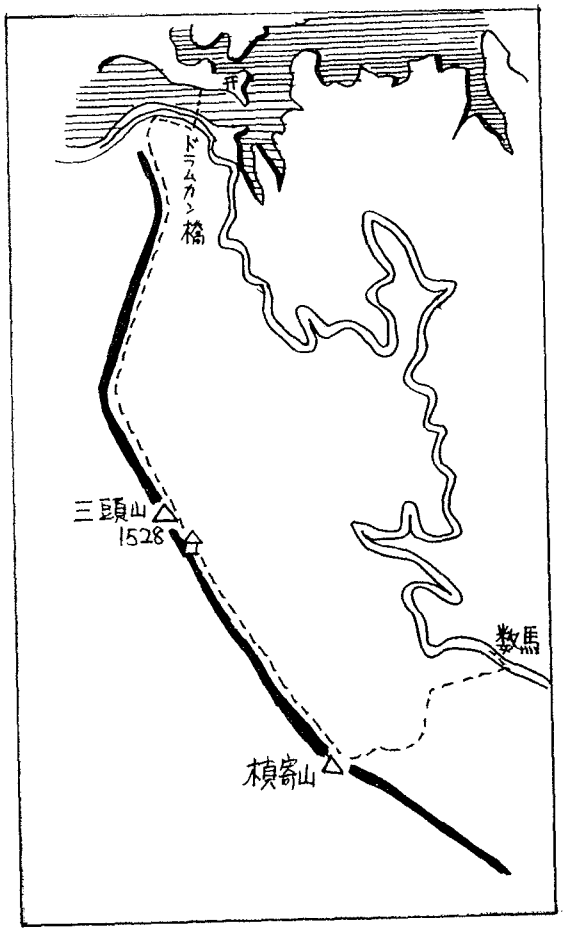
・81.4.19
・CL西入　SL加藤　森川(直)
森川(丘)　柳沢（2年）
萩田　吉田　江沢　山田　（3年）
三角　阿部　秋元　中川　中山
中村　今立　今西　山本　江頭
（1年）　その他 OB, OG　多数.

立川 7:51－武蔵五日市8:32－数馬 9:40－11:47 避難小屋 13:30－山頂 13:47－小河内神社前16:29－17:09 奥多摩（解散）

今回の新歓は、ちょっと趣を変えて三頭山。新入生が10人も参加して人数的には賑やかだったが、天気がいまいち。まあ、これは仕方がない。

五日市からのバスが長くて、混んでいて、いささかうんざりしたが、歩きはじめて2時間余で小屋着。
先発隊がなべのフタを忘れたため、多少すす臭くて苦いカレーをパクつく。食後のレクリエーションが近年盛り上がりに欠ける。2年が後片付けに追われ、そもそもあまり歌を知らない。予定より遅れて山頂へ。

山頂でもどんよりした空模様で見晴らしはあまりよくない。おまけに、下山に入ってすぐ小雨が降り出す。下りの偵察を途中までしかしていなかったせいもあって、不慣れなトップのハイペースをもってしてもなかなか距離があった。
フィニッシュのドラムカン橋は好評。
先発隊や1年生への事前の指示やレストのとり方に問題が残った。



5月月例山行
大菩薩嶺 ～ 小金沢山

・81. 5. 9～10
・CL西入　SL加藤　森川(直)
柳沢(2年) 秋元 中川 中山
三角 江頭 山本(1年)
山田(3年)

5月9日
高尾 9:31 ー塩山 11:03ー裂石
(昼食) 12:13 ー 14:53 福ちゃん荘(幕営)
就 20:00

裂石からは、しばらく アスファルトの林道が続き早くも 汗がにじむ。第二展望台を過ぎるころになると、初めてキスリングをしょう 1年が あえぎ始める。しかし、塩山から タクシーを使って 時間短縮したこともあって、予定通り、幕営地着。

5月10日
起 3:00 ー発 4:56 ー 5:48 雷岩(大菩薩嶺ピストン) 6:12 ー 7:05 石丸峠 7:20 ー 8:07 小金沢山 9:00 ー 9:41 石丸峠 10:00 ー 12:35 小菅 14:10 ー 15:15 奥多摩(解散)

カラマツ尾根を登る。最初のピッチから 直登の急坂で なかなか こたえるが、がんばらせる。天気がぱっとせず、雷岩に出ても富士山が何とか見えるくらい。ここから大菩薩峠への カヤトの明るい尾根は 晴れれば、右手に南アルプス連峰の展望が素晴らしいのに、残念だ。

石丸峠にザックを置いて一路小金沢山(雨沢の頭)を目指す。このへんから人跡が薄くなって新鮮な感じだ。カラ身のため、足取り軽く 山頂到着。五百円札に印刷されているのと、ほとんど同じ形、大きさの富士山を目前にして ランチ。ビスケットもまた うまし?

牛ノ寝の下りは単調でちょっと長いが、新緑の木々が目にしみた。バス停にたどりついた時間が狂って、まるまる1時間半 バスを待たなければ ならなかったのには 閉口した。

この山域だと、小金沢から更に南下して、湯ノ沢峠経由初鹿野というのが通例のパターン(多少強行軍)だが、女子3名参加ということで、牛ノ寝を下って奥多摩へ出るコースにした。しかし、男子にとっては 物足りなく、女子にとっては下りがきつい、と 中途半端な結果になってしまった。荷物分け、ペース配分、コース選定、指導などの面で 男女混合パーティーでの山行の難しさを味わった。

6月 月例山行
東丹沢 主脈縦走

・81. 6. 13～14
・CL西入　SL加藤　森川(直)
森川(安)　(2年)
三角 阿部 中村 中川 武内
今西(1年)
荻田・吉田(3年)
OB　木村氏

6月13日

西高12:43－下北沢13:21－渋沢15:05－15:20大倉－18:30ごう幕営地就 20:00

6月山行は、たいがい梅雨か、カンカン照りのようだ。どちらにしても夏山へ向けてのボッカとなるため、"恐怖の6月"である。

今回は前者。ザーザー降りのバカ尾根を汗まみれ、泥まみれになって、足取り重く登る。

大倉尾根の登りにかかっていくらもたたないうちに、1年がフラつき始め、尾根道の両側のわずかな平地に強引に3張のテントを立てる。

フライシートをたたく雨の音は一晩中続く。

6月14日

起3:00－発5:23－8:56塔ヶ岳－13:38蛭ヶ岳14:05－17:54東野18:21－19:40橋本駅　(解散)

出発から1年の1人が、ザックマヒ気味で、様子をみながらの登り。ぬかるんだ赤土の道が川になっている。何とか塔ヶ岳に着いて、早々に主脈に入る。11時頃・丹沢山通過。このへんから雨は止んで、蛭への登りでは、かすも時々きれた。

予定より二時間半ほど遅れて、蛭の頂上。下山路を一部変更。(焼山カット)して最短コースをかけ下ったが、1年の足元がおぼつかないこともあって、バスに乗る頃は夕闇が迫っていた。やはり雨のボッカは相当時間がかかる。今回は、多めの団体装と水ポ(一部では石)で重量調節をしたが各人の体力とのバランスが不均衡になった面もあって今後の下界でのトレーニングに課題が残された。

夏山合宿：北アルプス
燕岳－槍ヶ岳－薬師岳

・8/7.21～27
・CL西入　SL加藤　森川(直)
森川(丘)（2年）
阿部　中山　武内（1年）
OB　四宮氏　斉藤氏
顧問　渡辺先生　井田先生　奥山先生

21日　新宿 22:30

22日

4:36 有明－5:39－中房温泉 6:25－
－13:08 幕営地（燕山荘）14:54－
－15:13 燕岳－15:51 帰幕 就19:00

今年の夏は、夜行5泊6日で表銀座から雲ノ平経由で薬師へ抜けるという、いささか欲ばったコース計画。直前に1年の1人が急病で不参加となって、1年と付添（顧問）が、同数という異常事態になったが、ハリキリ2年が多めに荷をもって、満員列車でいざ出発。

初日。夏山の初日はキツイもの、ましてや今回は、北ア3大急登の1つである合戦尾根ということで締めてかかったが、曇った天気が幸いして、大体予定通り稜線に出てホッと一息。そういえば今日のランチはフランスパンだった。こういう目新しい？ものはなかなか美味いものだ。

テントで一休みしてから、ガスの中を足取り軽く燕ピストンへ向う。花崗岩がニョキニョキ突き出していて、おもしろい山だ。キンバイなどの高山植物のお花畑もまたいとをかし。

23日

起 3:00－発 5:15－9:11 大天井岳
9:50－14:01 幕営地（ヒュッテ西岳）就19:00

晴れた!! 朝日がまぶしく照りつける中を右前に槍、東銀の長大な尾根を望みながら進む。蛙岩や切通岩も何とか通過して、ランチをかゆえて大天井アタック。途中のハイマツの斜面で雷鳥に遭遇。大天井頂上では、大展望を恣にしてのランチ。それにしても暑い。

ここからが予想外に距離があって昨日の疲れも残ってか、幕営地に着いた時はくたくただった。こんなことでは、この先が思いやられる。それにしても幕営料、水代が高い。（合宿を通して1人あたり1000円強になった。）

明日は今回の合宿最大の正念場。天気と1年の体調を気にとめながらも念願の槍を思い描きながら山地より眠りに就く。

24日

起 2:00 − 発 4:04 − 8:12 槍の肩 − 8:43 槍ヶ岳 9:02 − 14:40 幕営地(水池)

就 19:00

出ました恐怖の2−4。星空の下で撤収し、まだ寝ているテントの間をすりぬけてヘッドランプをつけて出発。東鎌の下りにかかる。岩場のハシゴやクサリを慎重に下って、水俣乗越にたどりついた頃にはすっかり朝になっていた。ここからはあまりうれしくない岩稜を前方に槍の穂を望みながらぐんぐん登っていく。北鎌が圧倒的な迫力。森林限界を越えると突然、槍が目前にのしかかってくる。まさに、"聳え立っている"だ。

落石に細心の注意を払いながら槍の頂上へ攀じ上る。狭い頂上は登山者で満員。しかし、そんなことは、どうでもいいほど絶景また絶景。既に遠くになった燕からずっとたどって薬師まで目をやると、まだ全行程の1/3ぐらいしか進んでいないのには、更めて驚かされると同時に、今後の未知なる峰々への期待が高まるのであった。

西鎌を下る。ここからがまた一苦労で、特に最後の樅沢のガスの中の登りはちょいとばかりこたえた。

25日

起 3:00 − 発 5:02 − 7:37 三俣蓮華岳 − 9:54 鷲羽岳 11:00 − 12:53 幕営地(雲平キャンプ場)

就 19:00

今日は、これといって緊張する所もなく気持ちの良い尾根歩きが三俣蓮華まで続く。三蓮頂上からは雲ノ平の全貌が望め、その左に黒部源流をはさんで黒部五郎、右に颯爽とした水晶、鷲羽がひきたつ構図は最高のパノラマだった。背後には、槍が既に小さい。三蓮分岐から三俣山荘を経ていよいよ鷲羽の登りにかかるが、これがかなりの急登で、頂上までの2時間弱を1本にしたため、不満の声。やはり鷲羽池にでも寄って休むべきだったかもしれない。しかし鷲羽頂上でのランチは最高。北アのへそにどっかと腰をおろしている感じ。展望に関しては言うことなし。ワリモ岳、祖父岳を越えて雲ノ平へ入る。早めに幕営を終えて、後は、雲ノ平散策。いろいろな高山植物や庭園が広がり、さながら桃源郷にいる気分。機会を見つけて、是非、次回は、高天原の方へも足を伸ばして、温泉にも浸りたい。

26日

起 3:04 ー発 5:17 ー 9:41 薬師沢
10:41 ー 14:28 幕営地(薬師峠)

朝日の中を、雲ノ平の庭園を突っ切り、薬師沢に下り着く。雪融けの水流は身を切る冷たさ。皆でTシャツを洗ってサッパリする。

沢沿いのだらだらした登りが続き、やがてのっぺりした太郎平へ出る。薬師峠には、学生パーティーのテントが多く賑やかだった。

27日

起 3:00 ー発 4:15 ー 5:52 薬師岳 7:07
ー 7:49 帰幕 8:41 ー 11:07 折立 12:01
ー 13:05 有峰口 13:30 ー 14:20 富山(解散)

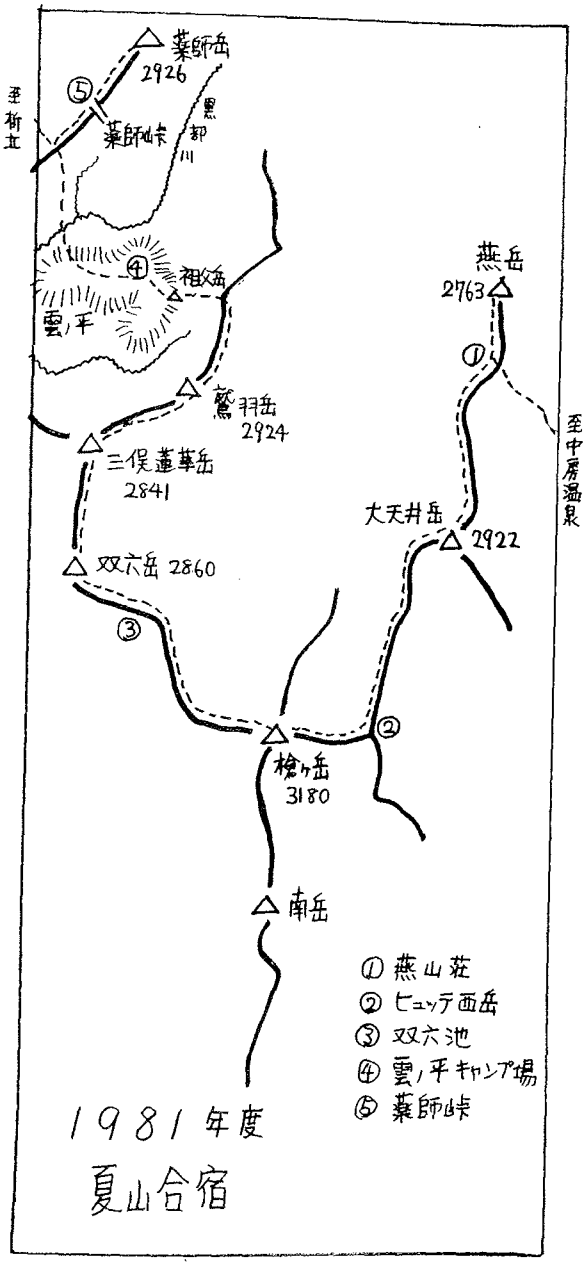
未明、速攻で薬師ピストンへ。登るに従ってガスがかかり、残念ながら頂上では展望がなかったが大満足。ほんの一瞬、はるか彼方にけし粒のような？槍の穂先が見えて、喚声があがる。頂上直下の雪渓でしばらく遊んで帰幕。

最後の下りは折立めざして一直線。思わず足がつりそうになった者もいた。

反省より抜き書き

- 声をあまりかけない
- 事前の1年への指示、トレーニング不足
- 主体性がない

etc.



9月月例 沢登り
笛吹川東沢

・81.9.19～20
・鎧冠谷右俣隊
　CL 西入　SL 森川(丘)(2年)
　中村　中山(1年)
　OB 宮崎氏　中野氏　中尾氏
　ヌク沢左俣隊
　CL 加藤　SL 森川(直)(2年)
　武内(1年)　吉田(3年)
　OB 河合氏　青谷氏　山野氏

　釜ノ沢隊(女子)
　CL 柳沢(2年)
　江頭　竹林(1年)
　OB 松本氏　山本泉氏

西朋の山行と合流して多数のOBと共に行動することになったが、あいにくの雨。せっかくの楽しいはずの沢登りも台無しだった。それでも、沢自体はそんなにおもしろくないものではなかったが、やはり午後発一泊だと範囲が限られてしまうようだ。

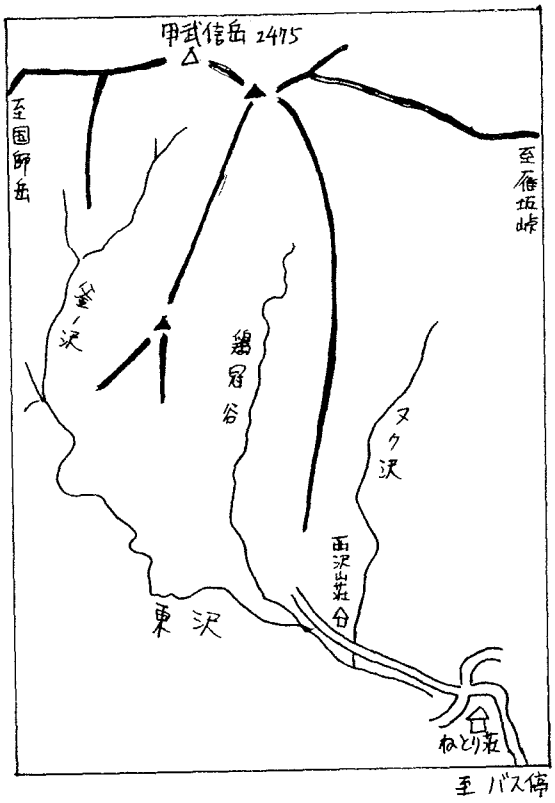
19日
西高12:45－15:45塩山－16:55西沢渓谷－17:25幕営地　就19:30

20日
起3:00－発6:43－各隊別行動(ヌク沢隊は朔行終了後 甲武信岳登頂)16:43までに全員帰幕－18:00塩山(解散)

"ラク石注意!!"

一年生の沢登りの時だった。初めての沢歩きにもようやく慣れた頃、大きな滝に出合った。巻き道を行くが、これも結構急な道だ。覚えたての三点確保で何んとかはい登っている時だった。突然前方、いや、上方から巨大な岩が転がって来たのだ。だが避けることもできずに右手甲に直撃をくらう。ばっと血が出た。一瞬の出来事であったが、この直後、上から「ラーク!!」と叫ぶ先輩の声がした…。……くれぐれも落石には注意しましょう!

あの日の、大した傷でない割に派手に出た血の色が忘れられない。



11月月例山行：南アルプス

鳳凰三山縦走

・81. 11. 21～23

・CL 西入　SL 加藤　森川(直)
森川(広)　(2年)
中村　武内　今西　(1年)
OB 松本氏

21日
新宿 23:55

22日
3:43 穴山 － 5:50 御座石鉱泉 6:43－
－ 12:08 幕営地(鳳凰小屋) 13:04－
－ 13:57 赤抜沢頭 － 14:45 地蔵
岳 － 15:20 帰幕　就 20:00

23日
起 4:00 － 発 6:30 － 8:32 観音岳
8:57 － 12:25 夜叉神峠 － 13:06
バス停 14:20 － 16:00 甲府 (解散)

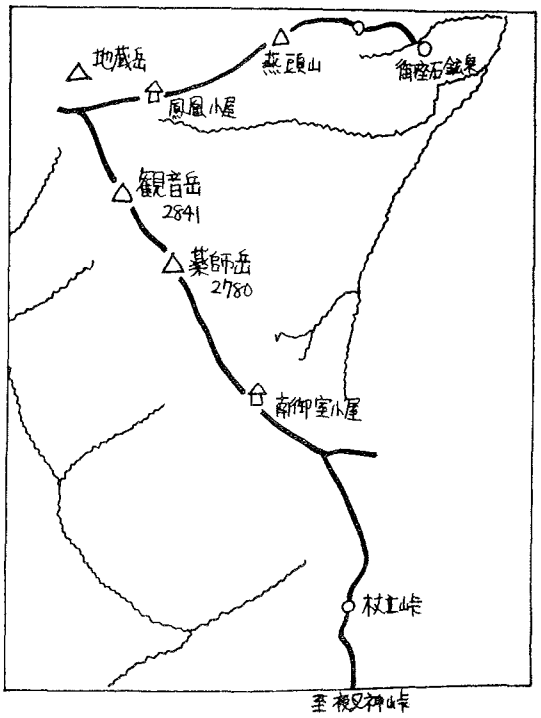
連休を利用しての鳳凰。11月からいきなり雪の南アとは、いささか強引だったかもしれないが、せっかくの機会なので敢えて行くことにした。

幸い好天気。背後に八ヶ岳連峰の美しい裾野を望みながら登っていき、燕頭山を過ぎてしばらくすると、30cmあまりの積雪。幕営地では、雪が固いバーンになっていて張るのに手間取る。

すぐに主稜線までアタック。目前の真白な白峰が圧倒的な迫力。その右には仙丈、甲斐駒。思わず唸る。地蔵は直下まで登る。夜、大展望の感動にさめやらず、寒さも物ともせず。

天気は下り気味だったが、観音まで一登りすると、さすがに三山最高峰だけあって眺めは最高。白峰、駒、仙丈はもちろん悪沢、槍、駒更には北アの連峰までが一望。吹きつける風の冷たさもしばし忘れた。

樹林帯に入ると、夜叉神まで一気に飛ばす。こうなると冬装は厄介物だ。予定より2時間以上早く峠に着くと雪がパラつく。夜叉神荘からの臨時バスの接続も良く、甲府では少々時間が余った。



スキー合宿
上州・武尊スキー場

・81.12.26 ～30
・CL西入　SL加藤　森川(直)
森川(丘)　(2年)
中村　武内　(1年)
柳沢　竹林　(女子)
OB 遠藤彰氏　松本氏

今年は雪不足だそうで、ここ武尊でも一部でブッシュがでていたが、全体としては、まあまあだった。初日の半日は基本的技術の練習。2日目からはリフトで上ってグループ別に滑降。雪不足のためイグルー作りは行えず、水作りも形式的にしかやらなかった。

中日、半日を費して前武尊まで雪訓クラストした雪で歩きにくい所もあったが、たいしたラッセルもなく2時間あまりで頂上。燧至仏や奥白根方面がよく見えた。

スキーの方はOBの指導もあって、皆それなりに上達したようだ。それにしても新森のピンクのオーバーズボンは遠くのゲレンデからでもよく目立った。

82年度山行を振り返って

36期　中村知朗

㊟(82年度報告は46頁以降)

82年度というのは例年と比べて、どうも異例の事態の発生が多かったようだ。それは部長であった私の責任によるところが大きいのだが、最大の原因として考えられるのは、OBへの依存が過ぎたということだ。この年の2年生男子は、わずか2人だったので、どうしてもOBや3年生の口出しを丸飲みにしがちになり、自分の信念に基いた行動がとれなかった様な気がする。更に、この年は西用も実動メンバー不足に悩んでいて、西高との都合がつきにくかったという悪条件も重った。そんな訳で、スケジュールも行動中もOB中心に偏り、春山ではそれが最も顕著に出てしまった。

しかし、あくまで主人公は我々高校生である。OB同行は必要不可欠のものであるが、それより前に、このことをよく考えてみてほしい。

1月 月例山行
南八ッ・編笠山～西岳

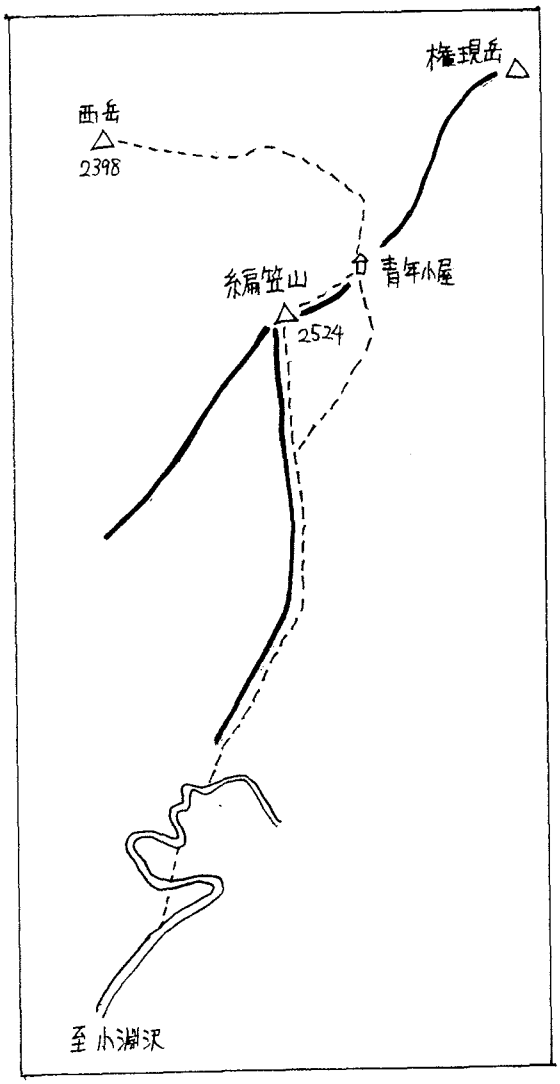
・82．1．23～24
・CL西入　SL加藤　森川(直)
森川(広)　(2年)
中村　武内　(1年)
OB青谷氏

23日
西高 12:50－17:00小淵沢－17:30
近道入口－18:15幕営地 就20:30

24日
起4:30－発6:30－8:33編笠山
8:55－9:13青年小屋9:45－11:45
西岳12:19－13:09青年小屋－14:30
幕営地15:30－16:42小淵沢(解散)

八王子で急行に乗り遅れてどうなることかと思ったが、幸い直後に臨時があって、何とか登山口までたどりつく。
朝の出発が例によって遅い。飯の炊き方に問題があるようだ。
編笠までは後半が喘登だが雪はそれほどでもなかった。頂上に着くと、360度視界が開ける。11月山行と逆に今度は八ッから南アを見返す形になった。そして八ッの核心部が圧巻。権現、赤岳、阿弥陀、横岳と、雪も積もらぬ岩壁が壮観だった。

時間が予想以上に余ったが、春山に備えてラッセルの訓練のため西岳を往復することにした。しょっぱなから道を失いさんざんなアルバイトをさせられる。西岳頂上からは霧が峯方面がよく見えた。
今回の山行では2年同志の無駄口が多く、OBから指摘をうけた。このことは何度も注意されたことでもあり、あえてここに述べることで反省促したい。



2月 月例山行
上信・四阿山（あずまや）

・82. 2.20～21
・CL西入　SL加藤　森川(直)
森川(丘)　(2年)
武内(1年)
OB宍戸氏

20日
西高 12:42－13:58 上野－17:19 万座
鹿沢口－17:50 鳥居峠－18:04 幕岩地
就 20:30

21日
起 4:30－発 6:18－11:56 四阿山
12:10－14:58 帰幕 15:47－16:20
万座鹿沢口　(解散)

目新しい山はないかということで『日本百名山』からみつけ出したこの山だが、全部で6人という寂しい人数に加えて、悪天候で残念な山行になった。

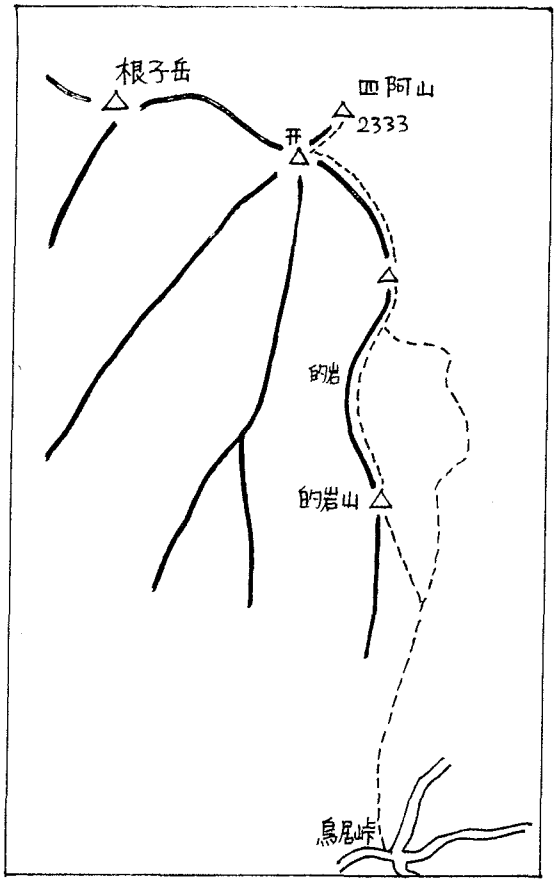
林道の途中でアイゼンを装着し、伐採地まで進んだところで道を失う。尾根に出るまでの直登は急だったが、適度にしまった雪のためかえって助かった。

東屋がある小ピークに着くと、一瞬四阿の上部が望めたが、すぐガスにかきけされる。晴れていれば、左手には、菅平方面が見えるはずなのに、と思いながら、いくらかヤセて小し岩のでてきた稜線を登る。

頂上でも四方は真白。祠にはエビのシッポができていた。シュプールが残っていたので、根子岳経由のリアーで来る人もいるようだ。

下山は的岩経由。少しは視界が開けて歩調もすすむ。的岩は豪快な巨石。高原の林の中に突然生えたようで、おもしろい。あとは道なき道を新雪を踏んで足まかせにガンガン下る。

装備の忘れ物が目立った。春山前でこんなことでは困る。



春山合宿：南アルプス
上河内岳～光岳

・82.3.20～26
・CL 西入　SL 加藤　森川(直)
森川(丘)(2年)
中村　武内(1年)
OB 松本氏

20日　東京 23:25
21日　2:29 静岡(仮眠)－5:47 金谷
5:56－井川－畑薙ダム－横窪沢
小屋　就

昨年度以来の懸案だった南ア南部を遂に春山でやれることになった。南は、春山では鳳凰や仙丈が相場だが、ただでさえ人の少ない南部も、悪くないOB1人というのが下界では心配されたが、そんなものは、どこ吹く風で、天候や雪の状態に最高に恵まれた、本年度の締めくくりとして、言うことなしの合宿となった。

出発日、東京駅集合、修学旅行ならいざ知らず、重いキスリングをしょって、東海道線とは、変な感じ。この山域は、アプローチだけでも大変で、静岡駅構内で仮眠、金谷で大井川鉄道に乗りかえ、千頭で更にちゃちな軌道線につめこまれる。更に井川からバスでいささか車酔いの感あり。

今日は朝から雨でしょっぱなから雨具をつけ、暗い感じで出発。大吊橋は慎重に渡る。一汗かいてウソッコ沢小屋で休んだ時、他パーティーから耳より？な話。我々より一足先に学生パーティーが光方面に入山しているとのこと。恐れていたルートファインディングやラッセルの負担も軽減される可能性大で思わずほくそ笑む者も。

小屋手前の雪も北斜面に手こずったが、何とか横窪沢まで登りつく。一旦やんでいた雨が再び降り始めたので、今日のところは幕営せずに、解放されている小屋を利用することにする。結局、夜半から天気は回復した。

22日
起　－発　－茶臼岳－仁田岳
－易老岳(幕営)　就

青空の下、次第に雪の深くなる登路を茶臼へ。茶臼小屋まではなかなか急登で長く感じた。アイゼンをきしませながら茶臼まで一投足。森林限界を超えた主稜線は流石に風が強い。しかし白銀の世界に心は軽やか。

茶臼頂上で遠い光や峻厳な聖などの大展望を収め、いよいよ縦走開始。

希望峰までの二重山稜は快適に進み、ちょっと立寄った仁田岳では茶臼とはまたちがった展望が目を楽しませてくれた。中途で例の学生パーティー（国学院大）に遭遇。寸又峡へ抜けるそうだ。我々も負けじと、明日の光までのアルバイトを考慮して行けるところまで今日中にできるだけ進んでおくことにする。

深雪のラッセルを覚悟していた低い尾根に入ったがはじめこそ苦しんだものすぐに楽になった。積雪が程よくしまっていて倒木で大変だった夏場より、かえって歩きやすくはなっている。暑いくらいの日射しの下、予想外にはかどって易老まで来てしまった。聖と上河内を正面に望む山頂に幕営。気分は上々。

23日

起 － 発 － 人サルが岳
－ 光岳 － 帰幕
仁田池（幕営） 就

光ピストンへ向う。迷いやすい樹林の尾根を慎重に、しかし快適に進む。トレースが残っていたので助かった。

センジが原（イザル・光の鞍部）に出る沢沿いの夏道は使えないので右の斜面をラッセルして直登し、森林限界を再び超える。強風の中をのっぺりしたイザル頂上に到着。意外に早かった。

ここから光は目と鼻の先のようで実際には多少時間がかかった。傾斜のでてきたハイマツと雪をかきわけ、遂に南の果て、光登頂。何の変哲もない樹林の小ピークだが感慨深かった。北方に目をやると、遥かに聖、上河内が春霞にかすんで見えた。

復路、光小屋の手前でカモシカを目撃。ここらの平原は夏はお花畑で素晴らしいし、冬は景色がいいし、何といっても人気がないのがいい。また来たいものだ。

この日は仁田池（とはいっても池は雪に閉ざされていたが）まで戻る。白銀の峰々が朱に染まる ここでの夕焼けは絶品だった。

24日 停滞

終日吹雪のため沈澱。しかし、昨日まででまるまる一日分の日程を余分にこなしてあるので、あせることなくテントの中で骨休め。

25日

起 － 発 － 茶臼屋
－ 上河内岳
幕営地 就

南アの大展望も今日で見おさめ。茶臼小屋に荷を置いてハイライトの上河内へ。軽快なピッチで稜線を目指す。南側から仰ぐ上河内は常念のような山容で意欲をそそる。

頂上へは比較的あっさり着いた。標高2803m 四方を遮ぎるものなく南部の峰々は全て見渡せた。何といっても圧巻は正面の聖。その右には赤石、悪沢と超ド級が連なる。振り返ると光への稜線が長々と蛇行している。身をさす寒風など忘れてしまうひとときだった。

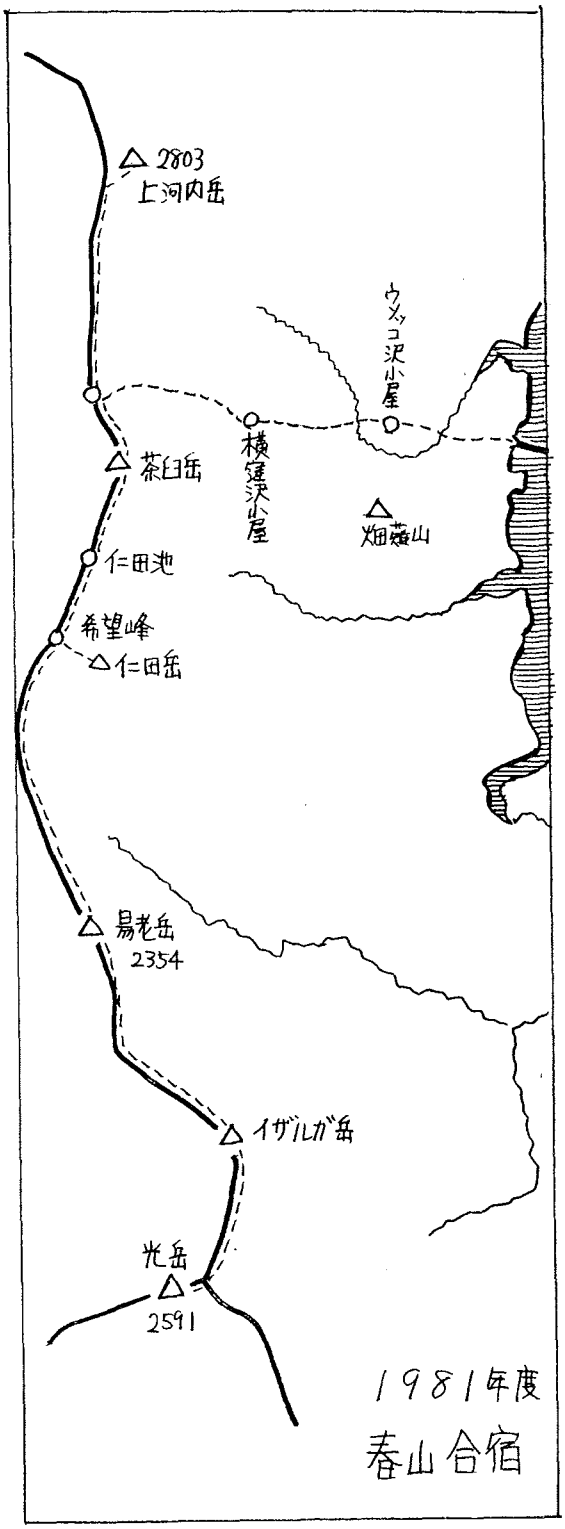
大展望を満喫し、頂上直下の二重山稜で雪訓（ここでの新森の滑りっぷりは見物だった）で2時間をつぶした後、一気に下山にかかる。いいかげん、足がガクガクになって、ウソッコ沢小屋から更に少し下った道端に幕営。既に白いものはあたりにない。最後の夜はお楽しみ。

26日

起 — 発 — 畑薙ダム

静岡（解散）

春山最後にしては、いくらも歩かぬうちにバス停へ。畑薙ダムから望んだ仁田岳の白さが印象的だった。静岡直通の4時間余のバスの中で今日までの登高が夢のように想い出された。



新入生歓迎山行
奥多摩：大岳山

・1982.4.18

・参加者：CL中村 SL武内.江頭
竹林（2年）
相沢.額賀.防野.小幡（1年）
西入.加藤.森川.森川.柳沢（3年）
林春彦氏.山野氏.岡田氏.荻田氏.吉田氏
（OB）

・武蔵五日市756－大岳神社1137－
大岳山荘1310－大岳山頂1329－
奥多摩1630

1年生が予想よりも少なく四人しか来なかったが、好天に恵まれ毎度同じみのカレーライスパーティーを大岳山荘で行った。最近、山の唄をうたえる人が少なくなり、多少にぎやかさにかける嫌いがあったが、一年生にとっては山への導入のための手頃な山行となったようだ。

下りの鋸尾根は新緑の御前山を斜(はす)に見つつしばらく行くと高木が増え、尾根もやせてきて、ハシゴ等が出てきて、登山道に趣きを与えた。程なく樹木の合い間に奥多摩の街が見えてきた。

6月月例山行
丹沢：表尾根～桧岳

・1982.6.26～27

・参加者：CL中村 SL武内（2年）
三木.額賀.鞆野.上野.防野
柴田.小幡（1年）
森川（直）森川（丘）（3年）
河合氏（OB）
顧問 井田.荒井

・26日 大秦野1430－ヤビツ峠1536－
二ノ塔1744－1810幕営地
27日 発700－行者岳822－塔ノ岳
1045－鍋割山1230－三廻部1638

不運にも台風の直撃をくらってしまい、予定の三ノ塔まで行けず、二の塔の頂上直下にテントを張った。

27日、朝方、風が強く天幕がなぎ倒されたりしたが、とにかく出発すると、次第に雲がとぎれ、強い日差しが照りつけるようになった。

行者の鎖場を越え、暑さに耐えられなくなった頃にまた天気がくずれ始め、塔の登りにさしかかる頃は雨も降り出した。鍋割山まで来た所で時間が足りなくなり三廻部へ下りた。

5月 月例山行
奥秩父：雲取山－飛竜山

・82.5.9～10
・CL中村 SL武内（2年）
相澤 辨野 額賀 三木
上野 防野 今野 小幡
柴田（1年）
西入（3年）

9日
奥多摩駅 9:35 －留浦 10:20－
七ッ石山 15:20－雲取山荘 16:20
（幕営）

10日
発 6:12－雲取山 7:16－飛竜権現
10:55－飛竜山 11:15－はげ岩
12:00－サオラ峠 14:45－丹沢
16:07－奥多摩 17:28（解散）

出かけから遅刻者が出るなど、ハプニングの多い山行であったが、好天気に恵まれ、まずまずの出来だった。一年には初めての本格的山行とあって初日からかなりのバテが見うけられた。
雲取山荘を出発。目の前に小雲取、その向うに雲取山が顔をのぞかせていた。初めのピークを登り切って振り返ると下方に雲取山荘とヘリコプターの発着場が見えた。樹林帯をしばらく行くと視界が開け、なだらかな道が雲取山頂まで伸びていた。頂上に着いた。晴れてはいるが霞のため遠くは良く見えない。目の前に飛竜山が、どっしりと構えているが、大分遠い感じがした。「あんな所まで行くのかよ」一年の悲哀のこもった声があがった。一気に三条ダルミまで下った後、ゆるやかな登りのダラダラとした道が続いた。
飛竜山は飛竜権現から樹林帯を十数分登った所にあるが、頂上も四方を樹木に囲まれ多少期待を裏切られた感があった。

山と動物について

山は自然の宝庫と言われ、歩いている途中でも動物と遭遇することがよくあるのではないかと思っていたが、実際に、3年間ワンゲルに籍を置いてみて、結果としては、カモシカ・鹿・蛇・ムササビ・兎をそれぞれ一回見ただけであった。荷物が重くて周りの景色など殆ど目に入らなかったのも事実だが多少残念だった。しかし、今、振り返って見ると、自分が山を歩いた時間も場所も、山から見れば、ごくわずかなのだから、あれでも大収穫だったのだろう。今日も、西高にはユウモリがちらつく。

夏山合宿：北アルプス
白馬岳 ― 爺ケ岳

・82. 7. 22 ～ 28日
・CL 中村　SL 武内（2年）
上野　額賀　神野　防野
三木　（1年）
OB 河合氏　斉藤氏
顧問 渡部先生　荒井先生

22日　新宿 22:30

21日出発の予定であったが、悪天のため、一日出発を見送った。合宿が晴天に恵まれることを祈りつつ……　OB等の見送りと、うれしい？差し入れをわんさか受けて、待望の夏山に出発である。

23日

5:28 白馬駅 6:10 ― 7:50 栂池 8:07 ― 11:55 乗鞍岳 12:30 ― 16:27 三国境 16:35 ― 18:20 幕営地（白馬頂上宿舎）就 23:00

車内で日の出を迎え雲の切れ目から、これから登る白馬三山が、輝やきながら顔を出している。バスで栂池に着くといよいよ登りである。天気はどんよりとした曇りに変わってきていて、かスの中を歩くといった感じだ。

出発早々、林間学校の大集団と遭遇し、止むを得ず道をよけて、20分の休憩である。視界が開けて天狗原となる。ここから雪渓の登りであるが、桁からの登山者の列で思うように進まない。どこが頂上やら見当のつかない乗鞍で昼食後、白馬大池付近の岩場を越えると、ようやく白馬への稜線らしくなってきた。慣れぬ荷物は身にこたえ、休む度に腰行きは怪しくなり、これは結構大変な合宿になりそうだ、と思い始めた矢先、とうとう降り始めた。やけに痛い雨だと思ったら、雹である。こうなると、もう何も見えない。三国境はなかなか現れず、白馬岳は、はるかかなたである。白馬頂上でとうとう三木がダウン。小屋にかつぎ込まれ、その晩は手当てを受ける。我々が到着したのはもう夕暮れで、既に幕営地にはあと一張すらまともに張れる場所は無い。ゴツゴツとした岩場になんとかテントを「立て掛け」た後、悲惨な一夜は暮れていった。

24日

起 7:00 ― 発 9:58 ― 12:30 鑓ケ岳 12:40 ― 13:30 幕営地（天狗山荘）就 20:00

朝、目が覚めると……まずい!!もう7時である。4時起き6時発

の予定が起床の段階で3時間も遅れてしまった。昨日の疲れのせいか、誰1人として先に目覚めた者はいなかったようである。本日もかなりの悪天で、展望はとうてい望めそうもないので予定していた清水岳アタックは、はやばやと断念し、天狗に直行となった。展望のない白馬三山は実につまらない。砂利しかない道を登り下りすると、これまた砂利の丘のような鑓ケ岳。それも一気に駆け下れば天狗岳との中間点である。そこを左手に10分程下り、雪渓の現れた辺りが本日の幕営地である。うっとうしい小雨の中、ズブぬれのテントを張り、就寝まで、怠くつであるが落ち着かない時間をひたすら食い潰した。

25日

起 4:00 ー発 7:25 ー 13:15 幕営地
(唐松山荘) 就 20:00

天候は相変らずである。出発直後から天狗の大下りの岩場、そして不帰の嶮が待ち構えている。雨で岩は滑るので鎖をたよりながら重い荷に揺られ、けん命に下る。しかしこの風景は傍から見ると実に滑稽なのだ。下り切れば休む間もなく、不帰I峰の登りにかかる。一歩一歩に注意が必要だからあまり疲れを感じない。雲の切れ間からちらりと立山方面や、これから行く唐松岳などが見えた。晴れていればさぞかしよいながめだろうが恐怖感もあるだろう。2時間1休憩を2度繰り返すと、意外とあっけなく唐松に着いてしまった。ここで何故か、一昨日ダウンした三木の父上と遭遇。(もう三木はすっかり回復している)五竜まで同行することになる。逆にOBの斉藤氏はここから下山した。それにしても料金改定直後とはいえ幕営料のみで一人一泊500円はあまりにも高い。「清掃料金」という名目からして、その前に我々の登山マナー再考の必要もあるのだろうが……。

26日

起 4:00 ー発 6:05 ー 9:25
幕営地 (五竜山荘 = 白岳) 就 18:00

今日もまたまた晴れなかった。予定では八峰キレット付近まで進むことになっていたが、この天候で、しかも確実な幕営地が無いので、明日に期待を賭け、五竜山荘で泊まることにした。五竜山荘と言っても本当は五竜岳の手前の白岳の頂上にある小屋である。ここからは、あれ

だけ大勢いた登山者もぐっと減ってくるので静かな道だが、場所によっては草木もうっそうと生えていて、まるで下界の森を歩いてるような気もしてくる。もーこんな所は歩きたくない、と思う間もなく到着してしまう。昨日以上にあっけない。我々は今、本当に夏山合宿をしているんだろうか？

27日

起2:00－発4:25－5:40五竜岳
6:00－10:20キレット小屋10:58－
13:15鹿島槍北峰13:25－14:24
鹿島槍南峰15:00－15:59幕営地
(冷池山荘付近) 就 20:00

本日の行程は長いので本合宿唯一の二時起きである。天気はやはり良いとは言えない。真暗な中を、撤収し、ヘッドランプをつけたまま出発。道は再び岩場状になり、強風も加わり足運びにも慎重さが増す。弱いアップダウンの後、本格的に登りとなり、一時間強で、頂上への分岐に着いた。ここに荷を置いて、食いたい物を持って頂上へ。分岐から頂上へは登りが全く無しである。頂上でも薄暗い中にガスがたちこめているだけであるが、今まで尾根歩きをしてきた中では一番頂上らしい感じがする山で、皆はしゃぎ回っていた。ここから今迄足場の指示等もしてくれた三木の父上は、山荘の方へ引き返して行った。我々は再びキレットを目指して出発したが、下りの道は登りの道よりも尾根がやせていて少々危ない。一年にそろそろ足のふらつきが目立つ者が出てきている。これといった急な登りも下りも無いが、小刻みに岩場のアップダウンが延々四時間も続く。風でたまにガスが切れるが、現在地の確認は難しかった。全体的に道は細く、ピバークとはいえ幕営はちょっと無理そうな所であった。昨日五竜岳を越えていたら、さぞかし難儀だったろう。ようやくキレット小屋にたどり着き、昼食の粉々になったビスケットをボリボリと喰らうと、いよいよ八峰キレットである。これを越えれば念願の鹿島槍である。最初から岩の急登かと思うと今度は大絶壁の降下で、これがキレットである。ハシゴを下ると左手に崖が落ちていて、はるか下方には雪の残る沢筋が見える。キスリングの幅のせいで、前向きには歩きにくく、壁にへばりつく感じのかっこうになってしまう。二番目のハシゴを連結部として、ここから崖は右手の方に変わり、鹿島槍への急登になるが、こんなに接

近してもまだ雄大な山影を一度も目にすることができない。はやる気持ちで北峰への分岐を一気に目指すが、遂に耐え切れず休憩をとる。実はすぐ目の前に分岐があったのだが……。空身で北峰をアタック。北峰には標識らしいものは何も無かった。戻ると雪渓まで下りてその雪にカルピスをぶっかけて食った。ちょっと汚れているが気にしない気にしない。吊尾根は岩がごろごろした緩やかなスロープで、設営可能な場所があった。たいぶ昔に先輩達がここにビバークしている。遂に目標としていた南峰に着く。3年生は1年の時に五竜から鹿島槍を眺に断念して下山しているので、その感慨もひとしおである。が、やはり展望はない。ここから冷池までは、ダッシュで駆け降りる。雷鳥とも遭遇する。このころから天気が急速に好転する。幕営地にて遂に雲間から鹿島槍が姿を現わした。ここは、他の登山客も大勢いて皆から大歓声があがった。明日登る爺の北・南峰はもとより、針ノ木・剣・立山など、おおよそここから見えるべき山はすべて見えて来て、ここぞとばかり写真を撮りまくる。ここに来てやっと今までの苦しみが報われたような気がした。皆の顔にも安堵の表情が現れている　明日―最終日も晴れそうだ。

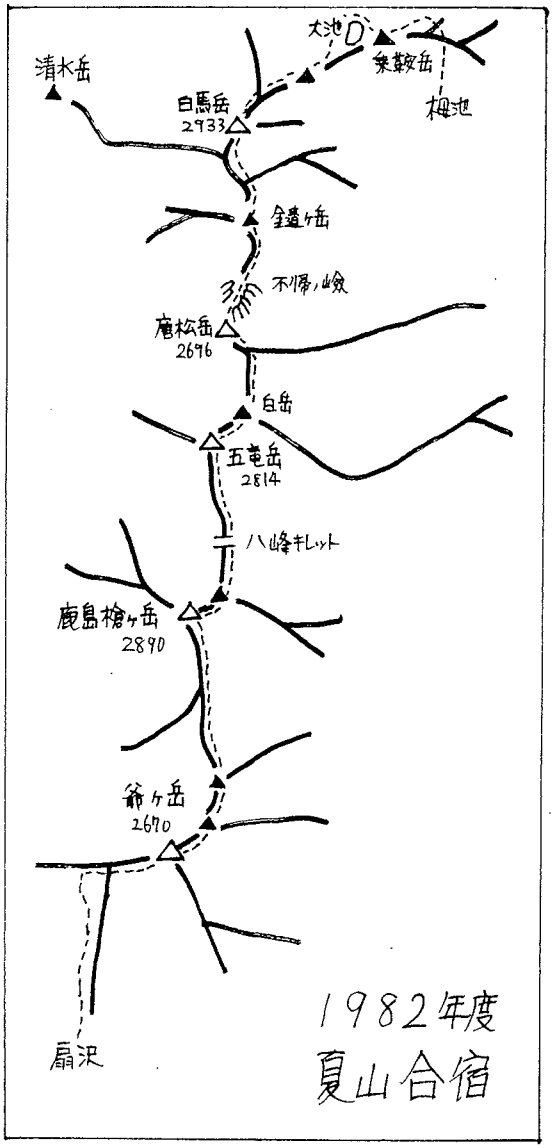
28日

起4:00－発6:20－7:40爺ヶ岳
8:10－9:50扇沢10:07－10:35
薬師温泉　(解散)

初の快晴の朝である。昨夕のシルエットの剣と違って朝の剣も別の美しさがある。種池山荘等もよく見えている。出発早々にして、CLである中村が財布を落とし、まだそれ程歩いていないという訳で、パティはそのまま進み、一人深しに戻った。先生、OBは既にもっと先の方を散策しているのでバラバラになってしまったが、爺頂上の時点では合流し、それまでの間も眺めが良いのでそれぞれお互いの存在を一望で確認することができた。爺頂上の眺めも各別で、北ア南部の展望が大パノラマで広がり、鹿島槍もその全山容を見せている。合宿の終点扇沢のバス停がずい分大きく見え、そこまでワンピッチで下ることを決意。昨日にも勝る猛スピードでパティーは再び二、三に分裂。それでも1時間半は充分かかった。到着してすぐに、先生が気をきかして温泉行き大型タクシーを呼んで下さり、全員が予期しない温泉で疲れを癒やすことができた。充分休んだ後、この場で解散、各自思い思いの方法で帰路についた。

―梅雨開けの遅かったこの年、平年の「梅雨開け10日」をねらった結果

逆に災となってしまったのは不運というしかない。例年この時期で1年生は、林間学校に参加できないのだが、今回の例もあるので、時期について考え直しても良いかと思える。夏休み中の準備・トレーニングという問題も生じるが……。



9月月例 沢登り
丹沢・セドッ沢左股，水無川本谷

・82.9.18～19
・CL中村 SL武内 (2年)
相澤 鞆野 額賀 三木 上野
防野 紫田 小幡 高橋 (1年)
松本氏 松本氏，井汲氏 宍戸氏
東山氏 (OB)

18日
渋沢14:45－大倉15:00－戸沢出合17:07(幕営)

戸沢出合は、いわゆるキャンプ場だったので夜中まで他のパーティーがどんちゃん騒ぎをして非常に迷惑だった。

19日
発5:55－分岐6:58－塔ノ岳
(2パーティー合流)－戸沢出合13:57
大倉16:35－渋沢(解散)

前日雨が降ったので、水量が増え、戸沢出合へ行く途中にも徒渉を要した。多少の滝はザイルをつけて登れたが、それ以上のものは高巻くことが多かった。草付きを登っている頃から再び雨が降り始め、塔ノ岳頂上での合流は小屋の中となってしまった。雨とは大分相性が良いらしい。どこへ行くにも必ずついてくる。困ったやつだ。

11月 月例山行

日光：女峰山

・82. 11. 20 ～21

・CL 武内（2年）
相澤 神野 額賀 三木 上野（1年）
中野氏 穴戸氏 松本（33期）（OB）

20日

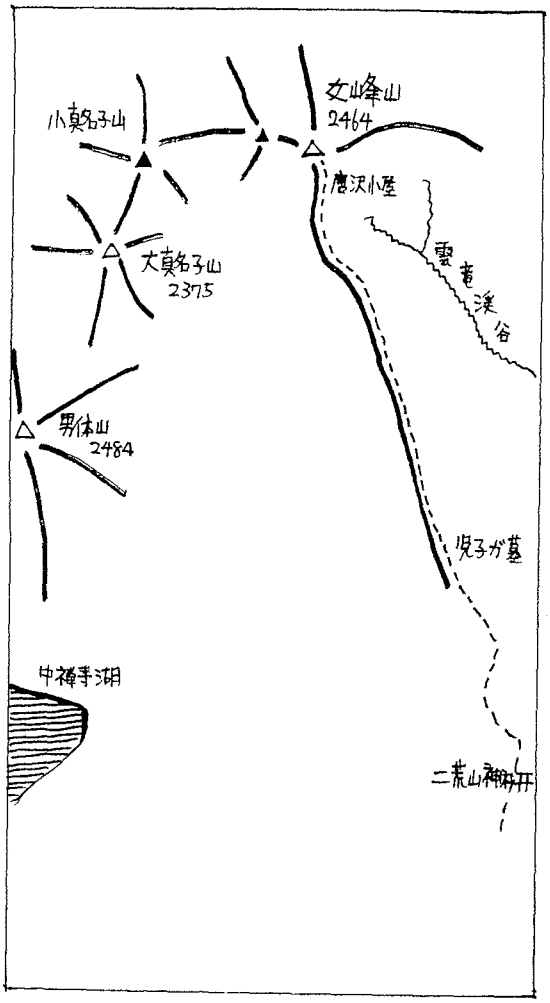
東武日光 16:42 ー二荒神社 16:50 ー幕営地 19:40

日光駅についた時はもう真っ暗で、歩き始めから懐中電灯をつけた。神社の裏から登り、クマザサの生い茂ったゆるやかな登りの道を、眼下に日光の街の灯を見ながら三時間程歩いた。が、幕営地まで着けそうにないので、途中の道の両側に、2つのテントを張った。夜半から雨が降りだし、「またか」と思った。夜中に中野氏到着。

21日

発 6:00 ー黒岩 8:55 ー唐沢小屋 10:45 ー女峰山山頂 12:07 ー西参道 17:20 ー東武日光 17:50（解散）

同じ道を往復する。単調で長く感じられる道のりではあったが、それなりの良さがあった。雪はほとんどなかったが、全ての樹枝に樹氷がびっしりとつき、午後になると、それが融け落ち、パラパラと降り、とても美しかった。
初日は生憎の雨だったが、翌日は、多少回復した。頂上では、奥白根山までは見えなかったが男体山、大真名子山等が美しい山容を浮かべていた。
また下山路、登山道にて休憩中一頭の野鹿と遭遇、しばし立ち止まっていた。



12月 スキー合宿
戸狩 スキー場

・82.12.26～29

・CL 中村　SL 武内　(2年)
相澤, 神野, 額賀, 三木, 上野(1年)
河合氏, 宮崎氏, (OB)

今年は例年にない雪不足で、出発ギリギリまで場所を決めることができなかった。とにかく戸狩に行ものの、人は皆誰でも同じことを考えるもので、少しでも雪のある所には、どっとんが操り出しその上、晴天続きで、地面が至る所で露出し、リフトも幾つか休止する始末で、一つのリフトに乗るのに小一時間待つ程であった。

28日、リフトが動き出す前に出発して、仏ケ峰まで雪訓。夜半からほた雪が降り始め、樹林帯のリフトの真下を直登したが、かなりのラッセルであった。リフトの一番上まで出てから比較的楽な尾根道を歩いて頂上へ。「帰りは今来た道を」と思ったが、途中から、道を離れて、沢沿いに下って帰る事になったのだが、道なき道を往くというのは、初めてだったので悪戦苦闘して、やっとテントの見える所まで出た時は、まさに感慨無量だった。

1月月例山行
奥秩父：瑞牆山－金峰山

・83.1.14～16

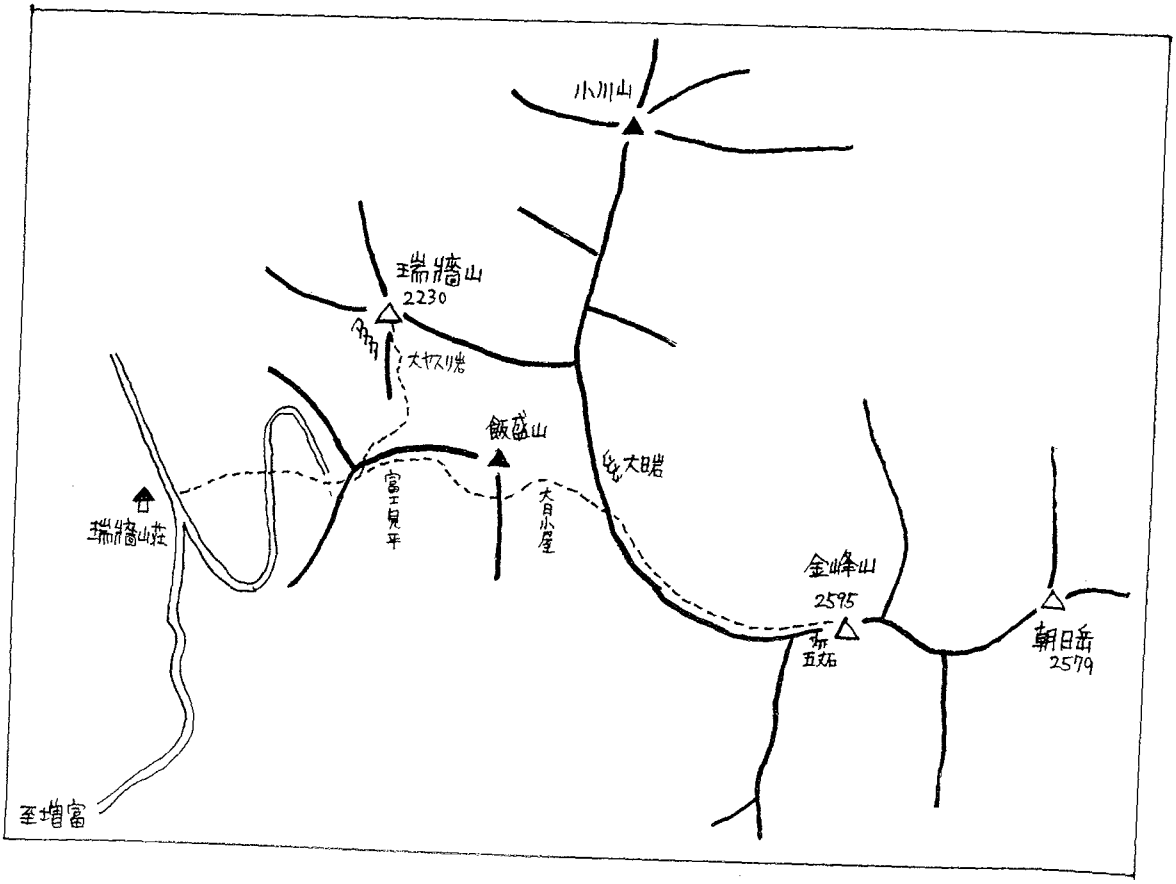
・CL 中村　SL 武内　(2年)
相澤 神野 額賀 三木 上野(1年)
河合氏 (OB)

15日
瑞牆山荘 7:17－富士見平小屋 8:20 (幕営)－瑞牆山 11:06－帰幕 13:20

韮崎駅からタクシーとマイクロバスを乗り継いで、増富ラジウム鉱泉経由で夜明け前に瑞牆山荘に到着。遠くに鉾を立て並べたような瑞牆山の先端が朝日を浴びて光っていた。山道に入り、林道を一回横切って更に登ると富士見小屋もすぐそこだ。途中登山道が、一面きれいに凍っている所があり、アイゼンなしだとスリルがあった。富士見小屋の前は、雪がほとんどなくてペグを埋められず、又、土が凍っていたので打ち込むのも容易でなかった。その上、OBがピッケルをテコに使って、折ってしまうという事態も起きた。瑞牆山頂上では、目の前に八ヶ岳を見て、南アから北アまで、白銀の峰々が肩を並べていて熱い紅茶が一段とうまく感ぜられた。

16日
発 5:17－大日小屋 6:07－金峰山 8:25－帰幕 11:30－瑞牆山荘 13:15－韮崎 14:40
(解散)

金峰山へのアタックは非常に軽快であった。登っている途中でも視界が開ければ、思わず立ち止まってしまいそうになる程だった。稜線に出ると、金峰山の象徴でもある五丈石が見えた。雪は少なく、アイゼンだけで歩き通せた。頂上は風が強くランチは岩と岩の間でとった。あとは一気に下るだけ。



2月月例山行
日光 前白根山

・83.2.23～24
・CL中村（2年）
相澤 上野 額賀 神野（1年）
井汲氏 宍戸氏（OB）

23日
西高 12:30－日光 16:40－湯本スキー場 18:05（幕営）

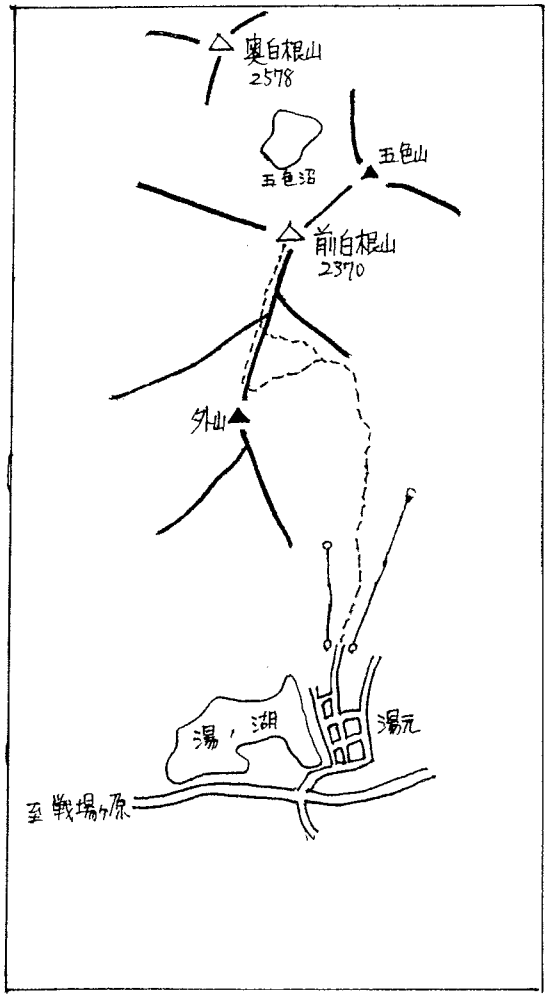
OBの都合が合わずに2月山行も大分遅れてしまった。24日というのは実は都立入試の日である。という訳で久々の平日山行である。更にSLの武内が脚の負傷、三木が交通事故の怪我で不参加となり、さびしい山行にもなった。日光駅には予定通り到着し、そこからタクシーで湯本まで上る。いろは坂を越え、戦場ヶ原の辺りでもう薄暗くなって来た

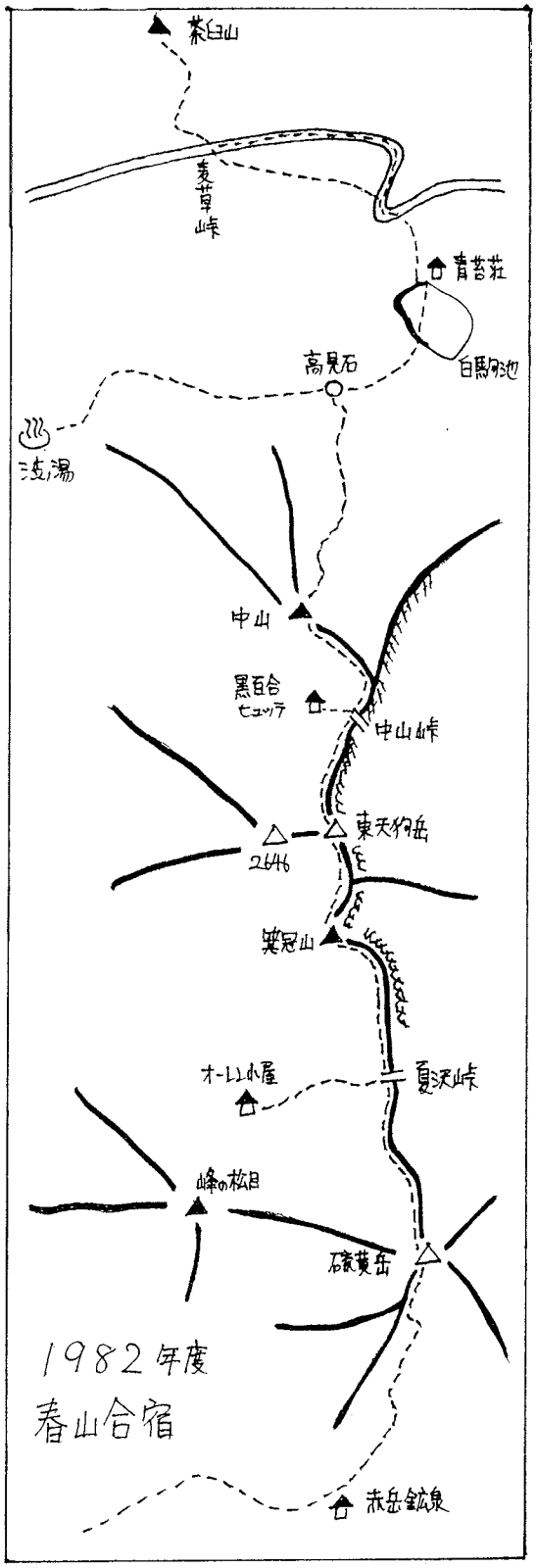
スキー場に入る頃は完全に夜になってしまった。スキー場にはテントを張る様な所が全く無く、暗闇の中の場所探しは少々不安でもあったが何とかゲレンデが二俣になったわずかな木影に張る事になる。中で冷えきった弁当を喰らい、就 21:00。

24日
起4:00－発5:57－前白根山12:20－剪訓1－帰幕15:50－湯本17:20－日光18:45（解散）

外は雪が降っている。強くはないがこの日は東京にも降ったという。いつもながら出発が遅い。しばらくゲレンデを登るとすぐに登山口である。出足から結構急な斜面が続き、相澤がたて続けに数回わかんを外す。ラッセルの訓練、それにSL不在という事でトップは百歩交代で歩く。新雪、しかも斜面がきついので、足場は崩れて我々には苦しいラッセルであった。夏道には、木に赤布がつけてあるので、それをたよりに登ったが、いつの間にか見失ない、南方にそれて尾根の一番端に登り着いてしまう。尾根に出たので一安心したが、少々あせかった。何度も前白根らしいピークが見えて来るが本物ではなく、精神的に疲れる。「あれこそ本物だから頑張れ！」と言って頂まで登ってみると、無情にも真向いにある山こそ、本当の前白根であった。内心死ぬ思いで頂上に立つ。既に予定を3時間もオーバーしているため、最初予定していた奥白根を断念、下山する。ガスでその奥白根も見えない。下りはうそのように速く、1Pでスキー場まで滑り降りる

（OBは本当に滑っていた）途中、他のパーティーに会ったが どうやら我々の跡をたどったらしい。遠回り、御苦労さん！ 時間が余ったのでOBの指示でピッケルストップの練習を笹の斜面で行う。新雪なので全然滑らず、滑れば止まらず、とにかく疲れた。悪天と単調なラッセルにとどめの雪訓が加わり、「もう二度と日光へは行きたくない」と皆、口々に言っていた。





春山合宿

北八ッ縦走・茶臼～硫黄

・'83.3.20～24

・CL 中村　SL 武内　（2年）
相澤 上野 額賀 辨野 三木（1年）
穴戸氏 井汲氏 宮崎氏（OB）

20日　新宿集合 23.45

この日は連休の2日目だったので混雑は大したことはなかったが、1年生は6時頃から並び、列の先頭を陣取る。OBの見送りは9人ほどで少々さみしい。それでも差し入れの量には圧倒されてしまう。何故かと言えば、種類が貧困だからである。ゆであずきは5kgにも達した。中にはキャットフードの差し入れというのもあったが、冷やかしとしか考えられない。同行OBは、22日迄は井汲氏だけの予定が、穴戸氏も登場。最後まで同行してくれるそうだ。22日には宮崎氏が井汲氏と交替する予定だ。上野が10時頃まで姿を見せず、気をもませた。

21日　342 茅野 418－450 渋ノ湯 545－752 高見石 810－843 青苔荘（幕営）－1130 麦草峠 －1240 茶臼山 1303－1433 帰幕

茅野には定刻に着いたが、ここで早くも予定変更を強いられる。麦草峠まで車が入らないのである。出発前に再三に渡りタクシー会社に問い合わせたが、そのときは入れるとの返答であった。止むを得ず、渋ノ湯から高見石経由で幕営予定地に向かうことにする。

天気は下り坂で今にも降りそうだ。いつもは元気な辨野が最初から不調を訴える。「クラスコンパで飲み過ぎた。」らしい。間近にそびえる中山を右手に見ながら高見石へと向かう。この辺は人も多く、賑やかだ。ここから幕営地へは少し下って、氷結した白駒池の上を歩くと直ぐである。

幕営を済まし、茶臼アタックに出る頃には雪がかなり強く降っていた。とうに雪に埋もれている林道に沿って樹林の中をひざ程度のラッセルで進む。麦草峠からはだらだら坂が続き、おしまいの急登を一息で登る。広い茶臼頂上は風雪のためすぐに引きあげた。行きのラッセル

跡もすでに消え、林道も場所によっては腰まで雪がある。

帰幕後、天気は好転した。

22日　起420－発650－743高見石810－932中山1006－1033黒百合ヒュッテ(幕営)1403まで雪訓

快晴にもかかわらず、出発が遅れる。パッキングの迅速化と目覚まし時計の修理が必要であろう……(!!)

高見石までは昨日の道を戻るが、展望は今日初めて見る。今日は井汲氏と宮崎氏の交替する場所―黒百合平泊りである。時間的には余裕タップリなので、景色のいい所ではゆっくり休むことになった。高見石を越え、中山に着くと、展望は更にひらける。入部以来、滅多に好天に恵まれなかった我々は、ごく当り前の景色にも感動を覚えずにはいられない。OB2人も「やっぱ晴れたのは初めてだ」と言って喜こんでいた。

中山から中山峠までは左手に爆裂火口の絶壁を見ながら正面の東天狗に向かって歩く。

幕営地では某大学のパーティーも幾張か張っていて賑やかだ。残った午後の時間は昨日濡れた物の乾燥と雪訓に費す。雪訓はイグルー作りであるが、リーダー以下現役全員が初体験である。OBの指導で、数度の崩壊にもメゲず何んとか完成する。新雪は何度踏んずけても固まらないし、堀り出した雪ブロックの中には小便混じりなんてのもあって大変ではあった。

3時頃、井汲氏下山。入れ替りに4時頃、宮崎氏来る。

23日　起300－発528－657東天狗岳707－813夏沢峠830－913硫黄岳929－(雪訓)－1145夏沢峠1203－1255オーレン小屋

どんよりした空で風もちょっと強い。岩の多い方のルートはやめて、中山峠を経由して東天狗を目指すことにする。峠近くで相澤が早速アイゼンをはずす。朝、慌ててつけたからである。

樹林を抜けると吹きさらしの急斜面である。左は絶壁だがガスで何も見えない。強風で体が少しよろける者もいる。急登をあえぎながら、一歩一歩ゆっくりと上がる。西高コールで気合いを入れるが、風でパーティーの端と端では叫び声も

届かなかった。

何んにも見えない天狗頂上を、早々にして去り、夏沢峠へと急ぐ。

やせ尾根からだだっ広い平原、火口沿いの樹林……と周囲はめまぐるしく変わり、だらだらと長い下りの終点が夏沢峠である。2~3張位しか幕営できない所だと思っていると、反対方向からキスリングのパーティーがやって来てそこに幕営を始めた。我々もそこに張る予定だったが、明日の上槻ノ木までの行程が長いので、硫黄アタックを今日に操り上げて、幕営地もこの下のオーレン小屋にしようということになる。まだ8時位だから、硫黄を往復して来ても、おつりが来る計算である。

デッカいキスリングはツェルトに包んで峠に放置しておいて、軽装で硫黄へ向かう。陵線の風でカチカチになった雪にアイゼンが心地よく食い込む。ガスで何んにも見えないので、単調な道が余計単調に感じられる。急登でいい加減にふくらはぎがつっぱる頃、ようやく頂上に着いたが、下りはそれと比較にならない速さで降りてしまった。

途中に手頃な斜面があったので昨日に続き雪訓を行う。今日は滑落停止と雪洞堀りである。とは言うものの、滑停では粉雪の急斜面のためか、ロクに止まる奴はいない。皆滑べると言うよりは、猛烈な加速をつけてはるか下方へ転落していくといった感じだ。そんな訳で10本もやると全員クタクタである。次にやった雪滑堀りは逆に粉雪のために皆、短時間でうまく堀ることができた。最後には全員の雪洞が中で横一直線につながってしまったが……

夏沢峠からオーレン小屋へと向かう道筋は途中までは確かにあったのにプッツリと途絶え、赤布も無い樹林の中にいつの間にか入り込んでしまった。そのうえ、ラッセルの最中で三木と相澤がたて続けにキスリングの肩ひものつけ根を引きちぎり、思うように進めなくなってしまう。リーダーが2人について、残りは先にオーレンへと急いだ。結局、下りにもかかわらず、夏道の3倍以上かかってしまった。人が入った形跡もなく、雪に閉ざされたオーレンは夏場の賑いが嘘のようにひっそりしている。幕営後、OBは先の道を偵察しに行くが、結果は絶望的で、このペースでは明日下山は無理のようであった。

天候も悪化し、みぞれが降り始める。あれこれ思案した末、もう一度硫黄を越えて、赤岳鉱泉経由で美濃戸口に下りることに決め、テントの雨漏りを恐れつつ就寝する。

24日　起300－発540－625夏沢峠
635－914赤岳鉱泉925－1155
美濃戸口1300－1350茅野（解散）

ゆうべのみぞれは雨となる。きのうの道をたどるのだから簡単そうな感じだが、どっこい、穴ぼこだらけの道も楽じゃない。額賀に至っては、沢筋を渡る所で足を踏みはずし、沢の深い雪の中に真逆さまに埋ずまってしまう始末である。ラッセルのときのように先頭を交替しながら夏沢峠へ出た。今日は昨日空身同然で登った硫黄をキスリングで登るのだ。

陵線の強風は昨日同様だが、今度は雨混じりである。右側から吹きつける雨が、非情にも雨具のすき間から侵入を始める。頭、腕、胴、脚、そして靴の中へ…。おかしな事に、濡れるのは体の右半分だけだった。雨は体ばかりでなく地面へも吹きつける。昨日あれだけあった雪が、今ではもうペラペラの氷のようになっている。水たまりと化した頂上は通過し、ひたすら赤岳鉱泉へと急ぐ。下り口を探すのに少々手間どったが、陵線の反対側に出ると雨も吹きつけず、雪も深くなったので、快調に下れる。やがて明確な道が現れ、樹林の中を駆け下る。ときたま、強く踏みつけすぎて、道に大穴を開ける者がいた。（中にはその穴から足が抜けなくなったバカもいた）あっという間に沢に落合い、赤岳鉱泉である。小屋付近には幕営跡がいくつかあったが、それを、散乱したゴミが余計目立たせている。雪山に来てまで、このような光景を見るとは思いもよらなかった。最低の常識すら守れぬ者には雪山どころか夏山にも登る資格はないと断言したい。

ここからは沢沿いに歩く。OBは先に行くと言って、あっという間に視界から消えてしまった。1Pで林道に出る。アイゼンをここではずしたのだが、意外にも林道がつるつるに凍っていて、逆にこっちで欲しい位だった。更に1時間で美濃戸口に着いた。一年間の締めくくりの春山合宿にしてはなんとも、あっけない幕切れのような気がする。

～編集後記～

▷ 実際の編集に入って、わずか2週間余りで印刷原稿が完成してしまった。21号が出てから10年、ようやく出る22号であるが、やる気を起こせば案外早く出来るものだ。だからこれからは、まめに出版してほしい。

▷ 山行総覧は10年分の山行記録の集大成であるが、年代によっては、期日・場所すら記録の残っていない年もあった。アルバム・食糧ノートにも残っていない山行は、雑編の「蒼樹」を参考にした。自分達の記録が他のクラブにしか残っていないとは悲しいことだ。

▷ 82年に西入先輩から資料を受け継いだ時、原稿は74年度のみ。81年度は西入先輩に頑張ってもらい、山行報告は74、81 82年度中心とした。79年度は山行報告書が保存されていたので、若干加筆訂正を入れて、掲載させていただいた。女子山行は連絡不足で省略となってしまった。23号に期待したい。

▷ 最後に清書の三人に感謝。どうもありがとう。

彷徨 22　1983年9月24日発行

編集　中村知朗　武内正和（36期）　印刷　(株)ナール

清書　沖田秀子（37期）笠原紀子　松原美佳子（38期）

発行　都立西高WV部　杉並区宮前 4-21-32